

【Infinite Dendrogram】
名も無き<マスター>
達の独白記

ナーバス

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

これに深い意味は無く、1リルほどの価値も無い。
だが確かに彼らは存在したし、彼らの思いも存在した。
ただそれだけの、ただの一葉である。

※時系列不定

※原作既読推奨

※ナーバスな雰囲気多め

※wiki見てるけどガバかったらごめんなさい

※短編集

※ノベルアップのデンドロコンテストに一部転載しております。

目次

王国所属 【剛剣士】 V : アームズ

1

皇国所属 【疾風槍士】 VI : ワールド

6

王国所属 【記者】 VI : エルダーチャリ

オツツ | 10

天地所属 【鍛冶師】 III : メイデンwi

thキヤツスル | 14

監獄所属 【高位書記】 VI : カリキュレ

ター | 19

皇国所属 【狙撃名手】 VI : レギオン

22

王国所属 【聖騎士】 V : カリキュレ

ター | 26

海国所属 【大海賊】 VI : ウエボン・ギア

| 31

黄河所属 【高位風水師】 V : ガーディア

ン | 36

王国所属 【高位従魔師】 VI : ルール

キヤツスル | 40

砂国所属 【獣戦鬼】 VI : ガードナー

アームズ | 45

皇国所属 【剛剣士】 VI : エルダーア

ムズ | 50

砂国所属 【高位従魔師】 V : アームズ・テ

	リトリ	54	無所属	【黒土術師】	V:ガードナー・チャ		
	監獄所属	【盾巨人】	VI:ガーディアン・	リオツツ	87		
	アームズ	60	皇国所属	【装甲操縦士】	IV:キヤツスル		
	霊国所属	【死騎】	VI:アドバンス	92			
68	黄河所属	【大盜賊】	VI:ラビリンス	95			
73	天地所属	【影】	V:エルダーアームズ	無所属	【大狩人】	V:ギア	100
77	砂国所属	【司教】	V:テリトリ	監獄所属	【暗殺者】	III:キヤツスル	107
81	海国所属	【―――】	0:―――	129	霊国所属	【書記】	V:アームズ
84							

王国所属 【剛剣士】 V : アームズ

王国所属 【剛剣士】 V : アームズ

ぼんやりと、南の空を見上げていた。

目の前に広がる青空には大小様々な雲と太陽、そして幾匹かの怪鳥が群れをなして飛んでいる。

恐らくは亜竜級のモンスターだろう。幸いにも温厚な種族なようで、敵意を持っていないように感じられない。

ギデオンの南方、レジエンダリアの方に巣でもあるのだろうか、怪鳥達は悠々と南の空へ消えていった。

こうしてなにも考えずに空を見ていると、自分が随分とちつぽけな存在に思えてくる。いや、事実ちつぽけな存在なのだろう。闘技場から逃げてくるような男にはおあつらえ向けの事実である。

そう。また逃げてしまった。これで何度目になるだろうか。

活動の拠点を決闘都市ギデオンにしているマスターの中でも、俺ほど情けないマス

ターはいないだろう。

今日もまた、俺は突きつけられた現実と向き合えず、この名もない小高い丘でただ一人、空を見上げてしまっている。

アルター王国決闘ランキング97位。

それが俺の実力を証明する唯一の指標だ。

決して低いランクではない。だが、高いランクかと言われれば口が裂けてもそうだと
言えない。

たしかに、記録上では王国の中で97人目に強いマスターと言えなくもない。だがそれは過ちだ。

決闘ランキングに乗っていなくても討伐ランキングに乗っているマスターは大勢いるし、上位クランに所属しているマスターはそもそも決闘に参加していないことの方が
多い。

はつきり言って、戦争参加権を得られない30位以下の決闘ランカーなんていうのはクランに所属する気もない三流ソロプレイヤーという認識で正しいくらいだ。

けれども、大多数のマスターなんてそんなものだ。主義も主張もなく、ただ他にする

ことが無いからデンドロをしている。そんなマスターは大勢いる。俺も含めて。

けれども、そんな有象無象にだって人並みの感情はあるし、劣等感に苛まれることだってある。いや、それしかない。

最初はそんなんじゃないかった。上位ランカーの戦いを見る度に、俺もあんな風になるんだと夢見ていた。互いに切磋琢磨しあうランカーたちに憧れてこのギデオンを活動の拠点にした。

けれど、続ければ続けるほど自分と彼らの差に絶望する。頭でどれだけシミュレーションしても、ここぞというときの判断も、覚悟も、冷静さも、全てが俺には足りなかった。届かなかった。

その結果を受け入れながらも懸命に前に進んだ結果が97位だ。

別に、それを恥だと思っただけは一度もない。

苦しい思いをしながら勝った試合は忘れられない財産となっているし、決闘を通して多くの友人もできた。

だが、それでも第一線で戦っている彼らを見ていつも思うのは、無限に膨らんだ劣等感だ。

超音速軌道を可能とする翼が羨ましい。自身を炎に変える必殺スキルが妬ましい。

超級職が、戦闘センスが、彼らの持つ何もかもが憎らしい。

そして何より、この黒い感情に簡単に支配される自分自身が情けない。

きっとエンブリオが第VI段階に進化しないのも、必殺スキルが芽生えないのも、この性根が原因なんだろう。

わかっている。彼らを妬んだりするのは間違っていると。だって実際そうだ。俺のプレイ時間は彼らに比べて短い。彼らほどデンドロに入れ込めていない。リアルの方が重要なのは当然だ。

だけど、だからと言って何になる。

俺が逃げ出したところでなんになる。

俺はただ、楽しくゲームがしたかったんだ。

……以前は、俺も克蘭に所属していた。と言っても、その克蘭だってランキングに入っていない小さな克蘭だ。それでも、一緒に王国中を回ったり、まだ見ぬアイテムやモンスターを求めたりするのは楽しかった。

けれど、ある事件をきっかけに克蘭は自然消滅した。

……俺達は護衛クエストに失敗したんだ。

13人のテイアンが死んだ。

子供は2人いた。

ここがゲームだとわかっていても、年端も行かない子供が、何の罪もない人達が強盗に襲われて死んでいくのを見てなにも思わないはずがない。

俺達が失敗したせいで、俺達が弱かったせいで、あの人達は死んだんだ。

事件以降、クランオーナーはデンドロで見かけていない。ひよつとしたら王国を出て何処かに行ったのかもしれない。けれど、もう俺には関係の無いことだ。

……俺は、どうしてデンドロを続けているんだろう。

見上げていた青空は、いつの間にか赤い夕焼けに移り変わっていた。

皇国所属 【疾風槍士】 VI：ワールド

皇国所属 【疾風槍士】 VI：ワールド

恥の多い人生を送ってきました。

別段と言ってそれについて何か弁解の余地があるわけではありません。私はそれともう愚かで矮小でけてして人として誇れたようなことを何一つ為さずに今まで生きてきたのです。

恥の多い人生を送ってきました。

いまさらそれに気づいたところで何になるのでしょうか。けれどもおかしなことに今の今まで私は自分が恥の多い人生を送ってきたことに何の違和感も持つてこなかったのです。そういう意味では私はようやく人と成れたのでしょうか。わかりかねます。

先の戦争から幾月日か経ちました。

破格の報酬に乗せられて、私は他の皇国所属のマスターたちと同じように数えきれな

いほどの王国の兵士たちを打ち倒しました。私のエンブリオはとても優秀でそれこそ赤子の手を捻るが如く容易に彼らの命を絶つことが出来たのです。

先の戦争から幾月日か経ちました。

いまだに私は自分のしでかしたことの重大性に気付けておりません。思案に暮れようとする、どこからともなく誰の声とも知らぬ優しい声が「この世界はゲームなのだ」とつぶやくのです。私は何一つそれに違和感を持たずに今もこのゲームを続けています。

転機は秋の空模様よりも明解でした。

物資運搬のクエストで、戦争後に皇国が占拠している旧ルニングス領へ訪れたのです。

その地に一人の「死霊術師」がおりました。マスターではなくティアンというのが珍しいのですが、どうやら皇国側も多大な被害の出たこの領地を何の対策も立てずに占領をしているわけではないようでした。

寝静まっている間にアンデッドモンスターに襲撃されるなんて、想像するだけで嫌なものですから、この対策は皇国にしては珍しくとても気が利いていました。

その「死霊術師」は水晶のようなものを手に持っていました。曰くその水晶を使うこ

とで死を浄化することが出来るというのです。魂や怨念という概念について事細やかに説明されましたが、私の理解の範疇を悠々と越えてしまい、私はただ、なるほどそんなのですねと人形のように相槌を打っておりました。

けれども、その【死霊術師】の話は遅効性の毒のように私の心を蝕み始めたのです。

旧ルニングス領から皇都に戻る道中、私はこの世界から離れたくなりました。

現実の世界に戻り、ヘッドギアを外すとどういふことか涙が流れていました。それから自分の心の整理がつくまで、私はデンドロにログインすることが出来ませんでした。きつと私は取り返しのつかないことをしてしまったのです。

たかがゲームに何をと言うかもしれませんが、マスターと違ってティアンは復活しません。つまり私はあの世界の可能性を一つ無くしてしまったのです。無限の可能性を提供するというのを売り文句にしているゲームの中で可能性を一つ潰してしまった。その矛盾を表現する術を持ち得ていない私はただ涙を流すことしか出来ませんでした。

しばらくの時間を空けて、私はデンドロの世界に戻ってきました。現実の世界にいたところで私は自分がしたことにしつかりと向き合うことが出来ないからです。

常人であれば既に出ているはずの答えを模索する旅に出るなんて、私はどれほど愚か

なのでしょうか。けれども、それでも私はそんな恥知らずな真似をしてでもこの恥の多い人生に向き合おうと思います。

王国所属 【記者】 VI：エルダーチャリオッツ

王国所属 【記者】 VI：エルダーチャリオッツ

行き詰まりを感じた時に、俺は決まって1つの動画を見る。

それは、諦めなかった男の動画で、初めて見た時からどれだけの時間が経っても色褪せることなく俺の心を支えてくれる。

動画の主役は王国で一番強い男。否、王国で一番強い男になった男だ。

全編通せば恐ろしく長いその動画は分割されたバージョンも投稿されているのだが、編集を加えていないオリジナルの動画が一番人気がある。

俺も所属している決闘マニアのクランにおいては、これを全部見ていることがクランに所属する条件とまで言われている始末だ。まあ、それだけ王国の「ヘマスター」の中でフィガロの存在が大きいということだ。

人気があるのだが、最初から最後まで見た場合、貴重な休日をまるまる消費することになるのが欠点と言えば欠点なのだが、俺はこの動画を見るのが大好きだった。

【剛闘士】 フィガロVS 【猫神】 トム・キャット。

幾度の挑戦の果てにフィガロがトム・キャットを下した、最強の決闘者が生まれた、あの日の動画だ。

一分の無駄も無く、そして欠片も諦めず、ただただ前に突き進む。数えきれないほどの攻撃の押収によって、果てしなく高く頑丈な壁を、決じ開け、乗り越える。そんな、言葉にすれば単純に極まる動画だ。

何が起こったのか、何度見直しても俺にはわからない。ただひとつ確かなのはフィガロの思いが届いたという事実。

無限連鎖のフィガロ。その名が示す通り、後半は現れる分身を全て倒し尽くそうとカメラの追えない速度で奮闘する。それでも絶えず増え続ける分身に折れることすらなく、ひたすら倒し続ける。常人であれば簡単に途切れてしまうような集中の糸を時間が経つにつれて逆に太くしていった、そんな試合。

不思議なことに、あれの真似をしようと思ったことは一度もない。

ただ、あの生き様に、ただただ勇気付けられた。

俺はフィガロと直接話したことは無い。アイツからしたら俺なんてその辺に落ちている石ころみたいなものだろう。

だけど、アイツがいたから俺は今でも頑張つて生きていけている。

リアルで、デンドロで、どれだけ辛い目に合ったとしても前に進む勇気をアイツから貰った。

そんな俺だが、未だに1つだけ納得できていないことがある。

……なんで戦争に参加しなかったんだ、フィガロ。

お前がいたら……この試合を成し遂げたお前なら、あの【獣王】も【魔將軍】も【大教授】のモンスター達も、倒せたんじゃないのか。

……何が「雑な戦いに興味はない」だ。

……もつとわかる言葉で説明してくれよ。

……なんで、お前みたいな凄い（ヘマスター）のいる王国がこんなに落ちぶれちゃってんだよ……

……なんでだよ、なんでなんだよ、ファイガロ。

画面の向こうにいる英雄はただただ戦い続けるだけで、何も答えてくれなかった。

天地所属 【鍛冶師】Ⅲ：メイデンWithキヤツスル

天地所属 【鍛冶師】Ⅲ：メイデンWithキヤツスル

今日もまた、生徒たちがへInfinite Dendrogramの話をしていた。

どこそこの領地に攻め入ったくだけの、どれだけの戦功を上げたくだけの、レベルがどれだけ上がったかくだの。彼らは無邪気にそう話す。

それが、正しい遊び方なのだろうけれど、楽しそうに話し合う生徒たちを見ると、胸の奥がギュッと締め付けられる。

数か月前から私の勤務している学校では空前のへInfinite Dendrogramブームが発生している。それと同時に私たち教育者が危機感を抱いたのはVRゲームが彼らの精神のどのような影響を与えるのか、ということだった。

もちろん、当の本人たちはそんなこと微塵も気にしない。私自身、VRゲームに夢中れる少年時代を過ごしたからへInfinite Dendrogramに飛びつく

彼らの気持ちもよくわかる。

静観を決め込んだ同僚と上司を横目に見ながら、個人、そして教育者両方の立場を踏まえて、私は〈Infinite Dendrogram〉をプレイすることにした。

最初の所属国には〈天地〉を選んだ。学校でその名前をよく聞いたからだ。生徒たちの中でも特に所属数が多くて人気がある国のようだった。

最初にログインした時の衝撃は言葉にするのも難しい。なにせ想像以上のリアルだったから逆に現実感が無い。そんな感情を得るぐらいには衝撃だった。

最初の方のことは割愛するが、ひよんなことが原因で事件に巻き込まれて命からがら逃走。エンブリオが発現したのをとある領主に見られ、メイデンの〈マスター〉は優秀なものが多いという話があるらしくて流されるまま屋敷に招かれて生活させてもらっていた。

年甲斐もなく戦闘をするつもりもなく、またエンブリオと相性が良かった【鍛冶師】というジョブがあつたのでそれを選択したが、これがまた私の性分と天地の情勢にとてもよく合っていた。

屋敷では【鍛冶師】としての仕事をしながら、リアル職業の教師としての能力を使って子供たちに勉強を教える日々を過ごす。特別なことは何一つなかったが、とても有意

義な時間だった。

だが、それは過ちだった。平和とは何よりも特別なことである。あの時の私にはそれが理解できていなかったのだ。

何時ものように屋敷の庭で子供たちと遊んでいると、突然屋敷が慌ただしくなった。あちらこちらで叫ぶ声が聞こえ、敵襲の二文字が脳裏に浮かんだ。

御屋形様に命じられ、私は子供たちを連れて裏道から逃げ出した。

護衛と一緒に子供たちを抱えて懸命に走ったが、後ろから恐ろしい軍馬の足音が徐々に近づいてくる。

そして、護衛の首が飛んだ。

空気の抜けたゴムボールのように、弾むことなく地に落ちた知り合いの顔。それを見た私の反応は早かったと思う。相方をキャッスル形態に変化させ、その中に自分と子供たちを全員入れて相手の攻撃を受け続ける。

強力な刀を作るために必要な耐久性を十二分に持つ堅牢な工房だ。生半可な武器で

は傷一つつかない。そう確信があった。逃げた子供を追うようなレベルの低いティアアの攻撃であれば耐えられるはずだと。

だが、私たちを襲ってきたのはティアンではなかった。対抗勢力に雇われたヘマスタ―は、私と同じようにエンブリオを持っている。耳が壊れるような衝撃音が幾度となく中にいる私たちを襲う。子供たちの悲鳴も聞き取りづらくなる。

最後に聞こえたのは相方のメイデンの泣き叫ぶ声。

最後に見たのは、嬉しそうな顔で私たちを見下ろす若い複数のマスター達だった。

デスペナルティを終え、私はデンドロにログインすると一目散に屋敷へと向かった。

そこには、何もなかった。

子供たちと授業をした離れも、遊びまわった庭も、兵士たちの稽古場も、御屋形様がいた本殿も、すべて。壊され、踏み荒らされ、折れた木々が散乱しているだけの土地になっていた。

どれだけの時間、立ち尽くしていたのだろう。何時の間にか紋章から出ていた相方を優しく抱きしめ、私は別れを告げた。

それ以降、私はデンドロにログインしていない。

監獄所属 【高位書記】VI：カリキュレーター

監獄所属 【高位書記】VI：カリキュレーター

ティターニア！ティターニア！ティターニア！ティターニアああああわああああああああああああああああああ！！！！

ああああああ…ああ…あつあつ…ああああああ…！！！！ティターニアティターニアああクンカクンカ！クンカクンカ！スーハー！スーハー！いい匂

いだなあ…くんくん

んはあつ！アイドルのティターニアさんの桃色ブロンドの髪をクンカクンカしたいお！クンカクンカ！あああ！！

間違えた！モフモフしたいお！モフモフ！モフモフ！髪髪モフモフ！カリカリモフモフ…きゅんきゅんきゅい！！

コンサートのティターニアさんかわいかったよう！！ああああ…ああ…あつあああああ！！ふあああああんっ！！

全国放送もされて良かったねティターニアさん！ああああああ！かわいい！ティ

ターニアたん！かわいい！あつあああああ！

〈マスター〉による同人誌も発売されて嬉し…いやあああああ！！にやあああああ
ああん！！ぎやあああああああ！！

ぐあああああああ！！同人誌なんて現実じゃない！！！！あ…デンドロもよく考え
たら…

テイターニアちゃん は 現実 じや ない？ にやああああ
ああああああああん！！うあああああああああ！！

そんなあああああ！！いやあああああああ！！はああああああん！！レ
ジエンダリアあああああ！！

この！ちきしよー！やめてやる！！現実なんかやめ…て…え!? 見…てる？ コンサート
ポスターのテイターニアちゃんが僕を見てる？

同人誌のテイターニアちゃんが僕を見てるぞ！テイターニアちゃんが僕を見てるぞ
！動画のテイターニアちゃんが僕を見てるぞ！！エンブリオに記録したテイターニア
ちゃんが僕に話しかけてるぞ！！よかった…世の中まだまだ捨てたモンじゃないんだ
ねっ！

いやっほおおおおおお！！僕にはテイターニアちゃんがいる！！やったよアムニ
ル！！ひとりでできるもん！！

あ、レジエンダリアのテイターニアちやあああああああああああん!! いやあああああああああああああああああああああ

あつあんああつああんあ翼神子様ああ!! バルク・ボルガンー!! LS・エルゴ・スムううああああああ!!! 皆アああああ!!

ううつううう!! 俺の想いよテイターニアへ届け!! 監獄からレジエンダリアの【妖精女王】へ届けエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエ!!!

皇国所属 【狙撃名手】 VI：レギオン

皇国所属 【狙撃名手】 VI：レギオン

好きな人がいました。

同じ学校の同じクラスの人でした。

いつも明るくて、けれど実は泣き虫で、自分のことだと耐えられるくせに、他の人のことになるとすぐ癩癩を起こす人でした。

デンドロは、その人が誘ってくれたんです。

他の皆はあんまりゲームに興味がないみたいでしたけど、私はその人と一緒に出来るのなら何だつて良かったので喜んで一緒に遊びました。

皇国を選んだのはその人の趣味です。ロボットとか戦車とか、そういうのが好きな子供っぽいところも大好きでした。

二人で色んな所に行きました。放課後から翌日の朝までログインすることは珍しくなく、程なくしてその人は「疾風操縦士」に、私は「狙撃名手」になりました。お金を貯めてバイクを買ってからは皇都から離れた所まで簡単に行けるようになりました。

当ての無い旅を続けていると、皇国の外れにある、小さな村にたどり着きました。

セーブポイントも何も無い、本当に小さな村でした。

村の人たちは随分と痩せこけていました。年寄りから子供まで、皆同じように【栄養失調】の状態異常に罹っていました。

もし〈流行病〉でも起きようものなら村が全滅してしまうことは誰の目にも明らかでした。

そして、そんな村を見てしまったあの人がどんな行動をとるのかも、私には明らかでした。

【疾風操縦士】の能力をふんだんに使い、皇都や他の街から食料を調達しては村に運ぶ。そんな生活を繰り返していました。見返りを求めることは無く、ただ、そうしたいと思ったからやり遂げる。「偽善者だ」と自嘲気味に言う姿は、横で見ている今にも擦り切れそうなのが分かるほどボロボロでした。

ですが、私が一番悲しかったのはあの人の心を支えてあげることが出来なかったことです。

村に一人のティアンが居ました。リアルの私たちと同じぐらいの年齢の女の子。彼が食料を運ぶようになって、弟や妹たちに自分の分の食料を渡すような、優しい娘で

した。

あの人がそんな彼女に引かれていくのは当然でした。

ティアンに恋をするなんて、馬鹿みたいだと思っていました。

だって、たかがAIですし。マスターに恋をするならともかく、リアルの肉体を持ってない人に恋するなんてどこがおかしいでしょう。

どうして私よりもそんなヤツに魅かれるの？ どうして私のことを見てくれないの？ 私はいつもそばにいたのに。そんなAIのどこが良いの？ そんな自己犠牲に酔った女のどこが良いのよ！ 自分も彼女と同じだなんて言わないでよ！ 私に見せない顔で笑わないでよ！ 私のことを見てよ！ 私の知らない貴方にならないでよ。私を置いていかないで！ 私が悪いの？ それともその女が悪いの？ 悪いのは自分だなんて、優しい声で言わないでよ。私からあなたを奪うその女を消せば、あなたは私のものになるのかしら、そんなドス黒い感情に支配されそうな私。自分で消すなんて出来ない。だってあなたに嫌われたくないから。あいつが勝手に死ねばいいのに。そうよ、〈流行病〉でも蔓延して村人全員いなくなってしまうのよ。そして傷付いたあの人に「あなたは悪くないわ」と優しく私が囁くの。そうすれば全部丸く収まる。

そう思っていました。

どうしようもなかったのです。

私たちは神様でも何でももない、ただのヘマスターで、リアルに帰れば普通の学生なんですから。

淀んだ風に乗って死がやってきました。

それ以降、あの人は壊れてしまいました。当然でしょう。目の前で愛する人が苦しんでいくのを成す術無く見ていたのですから。

それからしばらくして、あの人と離れて一人でデンドロをするようになった私の元に一つのうわさが届きました。

一人のバイク乗りが、幾多の村を回って食料を届けまわっていると。

その悲しい贖罪者の瞳に私の姿が映ることはもう無いのだと理解して、私の恋は終わりを告げました。

王国所属 【聖騎士】 V：カリキュレーター

王国所属 【聖騎士】 V：カリキュレーター

一仕事終えた後というのは、その仕事の大小にかかわらず爽やかなものだ。

ピンはねした報酬を受け渡した後、俺は人気の少ない路地裏から大手を振って大通りへと戻る。意識することは自然体だ。事実、何一つやましいことはしていないのだから変に怪しまれる行動をする必要はない。

デンドロの謳い文句に「オンリーワンを届ける」というものがある。けれど、なんだからだつて人間っていうのは「ナンバーワン」を欲しがるものだ。

裏付けがあるわけじゃあないんだが、俺はその「ナンバーワン」を持っている。

力？ノンノン。速さ？ノンノン。金？ノンノン。そんなちやちなもんじゃあねえさ。

リアルでもこつちでも一番強い武器は何か、それは、情報と人脈さ。『フレンドリストの登録数』とくに、わけあってギルドでクエストを受けることが出来ないような奴らとの伝手の数に関して言えば、俺はデンドロで1番の自信がある。

〈マスター〉には大なり小なりエンブリオっていう唯一無二の力がある。だから、多くの〈マスター〉の情報を持つているっていうことはそれだけ問題に対する対応策を持っているに等しい。俺からすれば、一人一人が顧客であるとともに商売道具であるってわけだ。

今終えた仕事だつて、いつも通りこのフレンドリストを非常に理想的に使いこなした結果だ。

【暗殺者】【騎士】【冒険家】 e t c . . . : e t c . . . : . . . 。このゲームではギルドから発注されるクエストは、そのギルドに所属してなかったら受注することが難しい。

逆に言えば、ギルドにさえ所属していれば、ほとんどのクエストは受注出来るつてことだ。ただ、一つ問題がある。それは本人の能力がそのクエストに向いているかどうかだ。

例えば「探し人」系のクエストは比較的【騎士】ギルドで発注されることが多い。だが、実のところそういったクエストは【騎士】よりも【暗殺者】の方が上手く達成できるケースが多い。

かといって【暗殺者】が貴重なジョブ枠を割いてまで【騎士】を持つていることは少なく、結果として仕事に向いてない連中がひーこら言いながらクエストを達成することが多い。

俺はそういう無駄の多いことが嫌いなんだ。じゃあどうすれば良いかって？【騎士】がクエストを受けて、それを【暗殺者】に協力させればいい。

俺のしていることはその延長戦だ。

俺のジョブ構成は、廃人様方が見たら無駄にしか見えないような、そんな構成だが、個人で受けられるクエストの数で見た場合は限りなく限界に近い理想値を持っている。

その理想値の受注可能クエスト数をふんだんに使い、俺はフレンドリストの中から口グインしているメンバーに合わせたクエストを片っ端から受け持つと、それを携えてそいつらのいるところに赴く。

あとは契約書を使ってそいつらが途中で投げ出さないようにした後でクエストを割り振れば、勝手にクエストが達成されるっていうわけだ。

もちろん、報酬の何割かは仲介料として俺が頂くことになってるが、これは正当な額に抑えて置く。

正直に言つて、俺ほど善意に満ち溢れたマスターはいないと思うね。依頼主はクエストが達成される。ギルドは信用を得られる。そして働いたへマスターへは報酬と承認欲求の両方が満たされる。みんなを幸せにして食う飯は美味いか？美味いに決まってる。

まあ、たまーに契約書代が馬鹿にならないんじゃないのか？なんて鋭いことを言つて

くるへマスターもいるが、あくまでこれは俺の自己満足だから仕方がない。

嘘だ、契約書なんて高価なもん毎回馬鹿みたいに使ってられるか。初回を除いて、あとは「詐欺師」のスキルとリアルで営業やつてる能力を駆使して、ただの紙切れを契約書のように見せてるだけだよ。

実際、一般的なへマスターは契約書なんて見たことも使ったことも少ないから気づくやつはいねえ。ていうか、気付いたところで約束を反故にするような奴は俺の手を借りたりしねえからな。

まあ、そんなわけで今日も俺の懐は温かい。こんなうれしいことはねえな。

とくに自分で言うのもなんだけど、リアルと違ってマジで誰も損をしてないのが良い。

俺だって営業入りたての時は必要とされているところに売るのが仕事だと思ってたつていうのに、今じゃいかに相手を騙して売るかに躍起になっちゃってる。

だから、ゲームとは言え、自分の能力を生かしたことが出来るのに気づいたときは本当に嬉しかった。

さーで、まだまだ無駄にしてる人材とエンブリオがあるはずだ！新規開拓は商売の基

本ってね。今日は志向を変えてルーキー辺りにも声をかけてみるか。

海国所属 【大海賊】VI：ウエボン・ギア

海国所属 【大海賊】VI：ウエボン・ギア

無数の砲撃が大量の水しぶきを上げてモンスターへと迫りゆく。群がる亜竜級モンスターが次々と白い光になって消えていく光景を見て心が躍らなくなったのはどれだけ前からだったのだろうか。

ああ、そうだ。アレからだ。

あの事件から、俺の気持ちは少しも前に進んじやいないんだ。

初めて出現したへSUBM、モビーディック・ツイン。アレと最初に遭遇した場所には俺もいた。

ひどい戦いだった。一方的な虐殺と言い換えても過言ではない。

大勢のへマスターとティアンが死んでいった。【大提督】カイナル氏の喪失は言わずもがな、そして、数少ない俺の親友たちも氏と同じように散っていった。

あの事件から舞い戻ったとき、醤油抗菌のアブラスマシは超級エンブリオに進化して

いた。事実、モビーディック・ツインを倒すためにアイツの能力は必要不可欠だったし、それで救われた命もたくさんあるのだからそれに対して思うことは何も無い。

だが、あの時から、俺の心の中でモヤモヤとしたものが絶えず渦巻いている。それは紛れもなく、自分自身への情けなさだ。

壁を前にして立ち上がり、前に進んだ醤油抗菌と、立ち止まった俺。英雄と自身を勝手に比べて凡人ごときが劣等感を得ているだけなのが何より、たちが悪い。

自分でも愚かなことはわかっている。それでも感じざるを得ない。同じような境遇に陥った者同士、けれど一方は超級エンブリオに進化し、故人の意思を継いで超級職を獲得した。

対して俺はどうだ、いまだ第Ⅵ。それも進化する気が少しもない。

俺だつて失つた。大事なティアンの親友たちを。けれどもそれでは何もかもが足りないと言われているような、そんな感覚に陥る。

何が違うというんだ。アイツにあつて俺にないものはなんなのだ。

年甲斐も無い堂々巡り末の癩癩を煩悶と言ひ聞かせて叫ぶのも自由。しかし恥ずかしい話、なんとなしに俺には何が違うのが分かつてしまっている。

情けない。

思えば他人と比べることでしか自分の価値を見出せない人生を歩んできた。今まではそれでよかった。人よりわずかに秀でていたことが多かつたばかりに、無価値な優越感に酔いしれて胡坐をかいていたのだ。

その結果が今の俺だ。

心根にへばり付いた傲慢な虚栄心を一度でも認識してしまえば、自己嫌悪に苛まれ、もがき足掻くことしか出来ない。

いつそのこと、目の前に広がる大洋のように奥底に怪物でも住んでいればよかったのかも知れない。

だが、俺の心の海に住んでいるのは蛙か、よくて山椒魚が関の山だ。

第VI形態に到達しているマスターの数は徐々に増えてきている。その中で頭一つとびぬけた奴らが〈超級〉になっているだけで、俺もそのうちそこにたどり着くのだと根拠のない自信を持っていた。

醤油が長らく姿を消してからも、ささやかでない程ほどのいざこざに揉まれながらデ

ンドロを続け、モンスターを倒しているが進化の兆しすら見えない。ただ時間だけが過ぎていくような、為すべきことを為せなかったような、そんな感覚だけが身に積もっていく。

俺はやはり特別な人間ではなかったようだ。もはや珍しくもなんともない、どこにもいる第VI到達の「マスター」になり果ててしまった。

最近、「マスター」の間で醤油抗菌が引退したのではという噂が流れている。だが、グランバロアのテイアンには彼の帰りを待つ者が多くいる。

それに比べて俺はどうだ。俺が明日からこの世界に来なくなったとしても誰も気にも留めないだろう。

そうだ。後ろ髪を引く仲だった親友は皆あの事件で死んだ。

ならばこれ以上続けて劣等感に押しつぶされる筋合いも無いではないか。

……本当に情けない。理由がなければ引退すら選べないような男だからエンブリオが進化しないのだ。

……本当に、一人きりになってしまったのだ。

船団に戻ったところで、酒を飲みかわす親友は、もう誰もいない。

何処かで蛙が一つ鳴いた。

黄河所属 【高位風水師】 V：ガーディアン

黄河所属 【高位風水師】 V：ガーディアン

夢にまで見たVRゲーム。

それも本当にゲームの世界に入ったような、現実と何一つ遜色無い感覚がある。デンドロを初めてログインしたときの感動は今でも思い出せる。

これは間違いなく神ゲーだと、心の底から実感した。

しかし、実際にやってみてわかったことは、このゲームはクソゲーだということだ。

はつきり言って運営が雑すぎる。イベントは適当だし、そもそも各個人のエンブリオの性能に優劣が有りすぎる。

そのうえ超級職とかいう先着一名のクソシステムがある上にリアルで適性がなかったら転職できない神シリーズとかマジで意味わからん。

おまけに本体の値段が安いばかりにクソ民度が低いプレイヤーが一定数いるのが

マジでクソゲー。

俺が今月に入ってから何回プレイヤーにデスペナされたか言ってやろうか？ 8回だ！ 8回！ 自己記録更新だよやったね！ ふぎけんなよクソPKが！

そもそも超級職の設定をしてるのにNPCが付いてるから転職できないとか明らかにテストミスだろ。

そんなところでリアル再現しなくて良いんだよ。職業奪おうにもNPC殺したらセーブポイント使えなくなるから絶対出来ねえ仕様だし、意味わからんわ。

あと、ほんと、勝手に頼って勝手に死ぬの止めてくれ。

達成不可能なクエストばかり発生するんじやねえよ、俺みたいなクソ雑魚マスターが一人頑張ったところで犯罪クランに勝てるわけねえだろ、クエスト失敗ばっかして、後味ばっかり悪くなるんだよ。

ほんと、やめてくれよ……

デンドロはクソゲーだ。

でもクソゲーにしているのは運営じゃねえ。プレイヤーだ。力あるプレイヤーが調子にのって弱者を襲うからクソゲーなんだ。

弱肉強食が自然の摂理だ、なんて言葉覚えたてのガキみたいに振りかざすなよ。

こんなリアルなゲームをやってるなら、力ある者が弱いものを守るっていう常識ぐらい持ってると思う。

アレだよ、任侠って奴だよ。今日日そんなの流行らねえと思うけどさ。

それから、遊戯派だの世界派だの言って価値観が違うのが当たり前みたいな風潮があるのもクソだ。

他人に迷惑かけてんだよ、てめえらのせいで罪のねえNPCが死んでいくのを見るたびに俺は不快に思ってるんだよ。

マジで意味がわからん。

デスペナルティも長すぎんだよ、雑魚マスターには仇を取ることも許されねえってのか？

俺に出来ることと言えば掲示板に犯罪クランにデスペナられた情報を書くぐらいだ。

けれど、掲示板は連中も見てるから全然意味がねえ。

弱者はどこまで行っても弱者だっていう、そんなことを見せつけられるゲームの何処が良いってんだ。

だが、俺は諦めねえ。絶対にデンドロをクソゲーから神ゲーに変えてやる。

舐め腐った連中は全員ぶちのめしてやるって、あの時から、あの人達を失ったときから、俺は決めてるんだ。

王国所属 【高位従魔師】 VI：ルール・キヤツスル

王国所属 【高位従魔師】 VI：ルール・キヤツスル

いっそのこと、血でも出ればよかったのだ。原形を留めないほど、見るも無残な姿に変わり果ててしまえば、現実と向き合わざるを得ないのだから。

瞼を閉じて淡んだ記憶を辿ることは、もう楽でなくなつた。一人ぼっちの逃避行も傍若な速度で迫る現実には追いつかれてしまえば叶わなくなつてしまふだろう。

常に意識していなければ、アイツらの鳴き声や手触りが零れ落ちてしまいそうな気がして、それがたまらなく恐ろしい。

最初のジョブに【従魔師】を選んだ時から、こうなる可能性については考えていた。他でもない、ギルドの先輩たちから言われ続けてきたからだ。

モンスターは死んだら復活できない。復活はへマスターにだけ与えられた特権で、アイテムモンスターと言えどもそれには抗えないのだと、耳にタコが出来るほど言われてきた。

俺自身、後輩の【従魔師】にそう言ったこともある。けれども、どこかで自分だけは

そんなヘマは踏まないだろうと置いていたことも事実である。

タイムモンスターは復活できない。野良のモンスターと同じように、死んだら光の粒子となって跡形もなく消える。

だからだろうか。知り合いの【従魔師】はある一定のラインを超えた途端に最前線から離れていた。

最初の頃はなんでそんなことをするのかわからなかったが、自分のタイムモンスターたちが一定のレベルに到達したときにその理由が分かった。

タイムモンスターは道具じゃない。家族なんだ。

最初にタイムしたへティールウルフやへパシラビットだつて、素質があれば上位種に進化することがある。俺のタイムした奴らは残念なことに1回の進化で終わってしまったが、それでも同種族のモンスターと比べたら歴然とした差が見えるほど強かった。

そして、そんなタイムモンスターと長く触れるうちにわかったことがあった。

奴らは戦うことを望んでいない。

奴らは、ただ生きていたいだけなんだ。

生を望むことは罪だろうか。いいや、そんなことはない。死を恐れるのは生物としての本能だ。死を恐れなくなってしまう存在は、もはや生物の域から逸脱してしまっている。

弔意。哀悼。鎮魂。哀惜。死者に捧げる言葉が数多く存在するのは、俺たちが死を恐れているからこそその裏返しだ。

俺はまだ、どれも出来ていない。

最近、同じ夢を見る。

夢の中の俺はルニングス侯爵領の村にいる。収穫の手伝いを終えた俺は村の外れでティムモンスター達を放牧していた。クエスト等の手伝いをしてもらった後はいつもそうしていた。自由に大地を駆けるアイツらが楽しそうに見えていたからだ。

突然、アイツらの様子がおかしくなる。辺りを警戒し、何かを訴えるように俺に吠えかける。だが、夢の中の俺は少し首を傾げるだけで何もしない。

遠くに映る山の色が変わっていく。辺りから鳥や虫の声が消え、そして……傷一つ無いまま、俺たちは、死んだ。

俺が、アイツらを殺したんだ。

閉じた視界にも関わらず、体調不良を告げるアナウンスが表示された。俺はすぐさまログアウトをする。

ベッドに横たわった状態でもはつきりとわかるぐらい、内容物が食道を逆流する不快感と酸味の強い香りが鼻腔の裏側から襲ってくる。

急いで洗面台に駆け込むが、出てくるのは胃液ばかり。身体がアイツらのことを考えるのを拒絶しているのがわかる。

だが、夢でアイツらの姿が鮮明に見えることに安心して俺もいる。

少なくとも、デンドロ口に入ったところでアイツらにはもう会えないんだ。だったら、もう夢を見続けるだけで良いんじゃないかな。

夢を見続ける限り、俺はアイツらを忘れない。記憶が上書きされることも無い。

何かを取りこぼすぐらいなら、俺はいつまでも、あの日のままで良い。

砂国所属 【獣戦鬼】 VI：ガードナー・アームズ

砂国所属 【獣戦鬼】 VI：ガードナー・アームズ

最近、デンドロにログインすることが億劫に感じてきた。

聞くとところによると、私のようにデンドロから離れていくへマスターは一定数いる
そうで、いわゆるへティアンとの間のリアル過ぎる人間関係に疲れてデンドロを去る
のだそうだ。

けれど、私がデンドロに億劫を感じている原因は、そういったものとは真逆と言える
だろう。

どれくらい前になるだろうか。皇国所属でこのゲームを始めた私は、同じころにデン
ドロを始めた友人たちと長い間一緒にチームを組んでいた。まだデンドロの情報が完
全に出回り切っていない状況だったこともあり、とても楽しかったのを覚えている。

数えきれないほどの全滅を経験したし、メンバー全員が不可能だと思っていたクエス
トを奇跡的に達成したこともあった。メンバー全員が上級エンブリオに進化したとき
なんかは、リアルな夜が明けるまでお祝いもした。

そしてしばらくが経ち、巷で超級職やへ超級の話が話題になってきたときのことだ、

私たちは所属をカルディナに移し、そこを本拠地とすることにした。

誰が言い出したのか、今となってはわからない。ただ、カルディナという大陸の中心を本拠地にするこのメリットについてはみんな知っていたし、他の国からカルディナに所属を変えることがヘマスターの中でブームになっていたことも理由の一つであることは間違いなかった。同時に、当初の私たちに「カルディナで一旗上げて上位プレイヤーになる！」という目標があつたことも事実だ。

まあ、目標というにはあまりにもおざなりで、それこそ小学生の頃に書いた夏休みの計画表にも匹敵する出来のものだったのだが。

現状を見る限りでは、小学生にも劣ると言つた方が正しいのかもしれない。

ベッドの横に無造作に置かれた端末から数年前に流行つたアーティストの曲が流れ、予定の時間を知らせた。

億劫に感じながらも、染み込んだ習慣によって私はデンドロの世界にたやすく導かれる。つまり、私も同じ穴のムジナというわけだ。

ログインポイントは、やはり克蘭ハウスだった。

私より先にクランハウスにいたのは6人。私の少し後に、残りの4人がログインしてきた。

全員が集まったのを見計らい、クランマスターが今日の方針を告げる。

「各自、強くなるための努力をするように。頑張っていこう！」

軽い言葉をかけられて気を良くしたメンバーの数人が、やはり軽い調子で返事をした。

これだ。ここ数か月、私たちのクランはこうやって無駄な時間ばかり過ごしている。

クランマスターは、それっぽいことを言っではいるが、ハッキリ言って自由行動と大差ない。そもそも、強くなるための努力なんて、誰だっけやってることだ。わざわざ口に出すことじゃない。

クランマスターと、その周囲の若いメンバーから目を背けていると、もつとも古い付き合いの一人であるメンバーが、窓際の椅子に座り込んで分厚い図鑑のような本を手に取っていた。

職業診断力タログと呼ばれる、上位プレイヤーを指すなら必要不可欠とされているアイテムだった。

珍しいね。と声をかけると「ほかに出来ることなんてないから」とそっけなく返され、そこで会話が終了した。

でも、私は知っている。彼がここ何日もその本を手に取っているが、少しもジョブを変えらるつもりなんかないことを。

人数のわりには、決して広くないクランハウスなのだが、私はどうもここにいると孤立感を得る。

カルデイナに來た当初は良かった。と思う。少なくとも今よりはずっと楽しかった。

無茶なクエストを受けて全滅して、装備やジョブの最適化をクラン全員で協力して考えて、ときには方向性の違いで喧嘩もして。そして何より、あの頃は周囲に未知が溢れていた。

何時からだろう。自分たちが特別な存在ではないと思うようになったのは。

何時からだろう。自分たちより先に常に誰かがいるとわかったのは。

何時からだろう。前へ踏み出す一步に意味を見出し始めたのは。

〈セファイロト〉をはじめとする大手クランや、その他のトッププレイヤーたちとの圧倒的な格差を見せつけられた私たちのクランに残ったのは、虚飾ばかりを張り付けた「飽くなき向上心」のみだった。

もう何も残っていないに等しいクランにそれでもしがみついているのは、楽しかったあの頃の記憶を手放すことが出来ないからなのか、まだ期待している自分がいるからなのか。

私の心の中には、未だにあの頃に掲げた幼き目標が残っていると信じているのだが、この気持ちも私の意志と関係なくあっけなく燃え尽き灰と化し、この全てを飲み込む砂の大地に消えていくのだろうか。

それでも、この億劫な気持ちから解放されることは無いのだと、私は理解した。

皇国所属 【剛剣士】 VI：エルダーアームズ

皇国所属 【剛剣士】 VI：エルダーアームズ

ある朝、庭に一輪の花が咲いていた。真っ白な花で一点の汚れも見当たらないから、わたしなんかが見つめてしまえば汚れがついてしまうのではと心配するほど綺麗な花だ。

同居人曰く、この家の元の主人には花を植える器量なんて無かったようなので、きつと鳥か何かが運んだ種が芽を出したのだろう。

この世界で意味があるかわからないけど、辺りの雑草を抜いてあげることにした。少しでも立派に育ちますようにと。

やがて、わたしの手が土で汚れきった頃、覚束無い足取りで階段を降りる音が家の中から聞こえてきた。

もうそんな時間になってしまったのかと思い、わたしは朝食の準備をするために急いで家の中へと戻った。

家に入ると、そこには寝間着姿の同居人がいた。

いつものように寝ぐせは直されておらず、いつものように部屋の家具に片手を付けたまま、彼女は、わたしのいる方、いや、正確には扉の音がした方を見ている。

「おはようございませす、おじさま」

「ああ、おはよう。今日も早起きだね」

「ええ、実は小鳥の声が聞こえたから何時もより早く起きてしまったのよ、でもいつもと違う時間にならないと動くのが怖くて、それで今降りてきたの」

そう言う彼女の瞳には、やはりいつもと同じように光が映っていない。

ただそれでも、エメラルドのように美しく、そしてすべてを見通すかのような神秘的で同時に、わたしにとってはこれ以上ない恐ろしい瞳であった。

彼女は〈マスター〉ではない。彼女は王国のテイアンである。わたしが長期的に滞在している、この王国の外れの村に父親と一緒に住んでいた……らしい。

彼女が父親とどのような生活をしていたのかは、彼女の境遇を考えれば想像に難くない。

生まれつき視力を持たない彼女でも、家の中であれば比較的器用に動き回ることが出

来るがそれは裏を返せば家の外での行動はやはり難しいということになる。

それでも彼女にとって幸運だったことは、彼女の父親が多大な愛を持つていたことだ。娘の不幸を不憫に思った父親は兵士をやめ、この村で【農家】として穏やかな日々を過ごしていた、らしい。

わたしと彼女の関係は至極わかりやすい。

わたしは、彼女の父親の仇である。

どうして、兵士をやめた男が王国と皇国の戦争に参加したのか、わたしにはわからない。

だが、彼女のために立ち上がったことは間違いないのだろうと、彼が息絶えるときに零れた、わたしにしか聞こえなかった一言から、そう察している。

「ぱんぱんぱん」

気付かないうちに随分と沈黙をしていたのだろう。慣れた様子でパンを手にとって

食べていた彼女の美しい瞳がわたしを見つめていた。

「ああ、ごめんよ。一緒に食べようか」

何事も無かったようにそう言いながらパンを手に取るわたしは、きつとひどい表情を
していただろう。

非道い奴かもしれないが、わたしは彼女の目が見えないことに心から感謝していた。

わたしは臆病だから、きつと彼女の目が見えていたらこうして一緒に暮らすことな
てできなかつただろう。

ときどき、いつまでこの生活が続けるのか自分に問いかけることがある。

贖罪などという甘えた言葉を振りかざす気は無いのだが、端から見たらそうとしか見
えないだろう。

わたしがこうしたところで、無念の死を遂げた彼の魂が救われるはずもない。

これは、ただの自己満足だ。

ハッピーエンドを目指す資格を、この身は持ち得ないのだから。

砂国所属 【高位従魔師】 V：アームズ・テリトリー

砂国所属 【高位従魔師】 V：アームズ・テリトリー

やらかした。ああ、やらかした。

こいつは随分と高い代償になった。だが、そんなやばい状況にも関わらず冷静に考えている俺がいる。

普段と同じように楽しんでいただけだった。だが、相手が悪かった。そうとしか言えねえ。

自慢じゃないが、俺は非常に道徳心溢れるプレイヤーだ。何事も良識のある範囲で楽しむことが俺の性分と言える。

だつてそうだろう。人生は短い。デンドロがいくら現実の3倍の速度で進むと言つても、もう既に3年が過ぎてるんだ。一時の感情に任せて無謀なチャレンジをして時間を無駄にするなんてあっちゃやならないことだ。

そう。3年だ。この3年で情勢はかなり変わった。

エンブリオが第7段階に進んだ奴だっているし、超級職を上手いこと勝ち取った奴だっている。まあ、どいつもこいつも人より少し運と才能に恵まれただけのクソ野郎どもだ。そいつらが悪いとかは微塵も思っちゃいねえ。羨ましくは思うが妬ましくは思わねえ。なんたつて俺は道徳心溢れる良識のあるプレイヤーだからな。

この3年を象徴するのは、そういう上位組のことじゃねえ。

所属国を鞍替えしたマスターたち。

ハッキリ言っつてこいつらが今のデンドロを回してると言っつても過言じゃねえ。

俺は最初からカルディナを選択したマスターだ。だからわかっちゃう。何がって？

よその国でカンストしたマスターが揃いも揃ってこの国に増えつつあるってことさだ。

全くなんだつて言うんだ。

エンドコンテンツを求めるのにはちいと早すぎるんじゃないやねえか？

そんな面倒な世界になってるから、起きちまつてるから、今の俺の状況が生まれち

まったんだ。

いつも通りだ。そう、いつもやってることをしてただけだったのに。

M P Kという言葉がある。

一言で言うと、モンスターを使って他のプレイヤーを倒すことだ。

一般的に知られてるのは大量に引き連れたモンスターのヘイトを相手に移し変える
モンスタートレインと呼ばれる方法だ。

俺の楽しみって言うのはそれだ。

自分で言うのもなんだが、欠片も戦闘力を持たない俺のエンブリオじゃあどうあがいたって他の戦闘職みたいには戦えねえ。

最初からアドバンテージを1つ失ってるみたいなもんだ。だから同じ土俵で戦うのはやらねえ。

その代わりの方法として思い付いたのが、このM P Kだ。

【高位従魔師】のスキルでタイムしたモンスターを使ってそこら辺にウヨウヨいる
ワーム共を引き付け、他のプレイヤーにぶつける。

タイミングよく《送還》を使ってタイムモンスターを回収すれば、あとは楽しい大事
故の出来上がりだ。

落ちたアイテムボックスの中身を回収するのは実に楽しい。

もし間違えてティアンを殺したとしても、別に俺がやった訳じゃねえ、今のところは、おとがめ無しだ。死人に口なし。それに証拠がないからな。

そう。おとがめ無しのはずだった。だったんだが……今はマジでヤバイ。

恐らく何かの超級職に付いてるようなやべえ奴がいる。

タイムモンスターは《送還》する前にやられちゃった。逆に言えば相手には俺の存在が《看破》されちゃまってる可能性がある。いや、されてる前提で動くべきだ。

引き連れたワーム共？ 瞬殺だよ。おれの低いAGIじゃ何が起きたのかすらわからなかった。

こいつはヤバイ、マジでヤバイ。

あんな化け物があるなんて聞いてねえし、そんなことを念頭に置いたら何もできやしねえ。

こつちは持てる実力の範囲で楽しんでるだけなのに、なんでこうなっちゃまうかねえ。

仕方がない。ここは早いうちにログアウトをした方が良さだろう。俺の存在はバレてるだろうが、一度ログアウトしてセーブポイントでの再ログインをすれば最悪の展開だけは避けられる。

ログアウトには時間がかかるからな。さっそくログアウトを選択し、おい、なんでログアウト出来ねえ!?

接触?他のプレイヤーと?いやいや、そんな馬鹿な。へマスターへはおろかへモンスターへすら近くにいなえっていうのに何と接触してるっていうんだよ。

……まさか、テリトリー系列の範囲内か!

畜生。こいつは流石に詰んじまったかな。あーあ。楽しいゲームライフだったんだが、このままじゃあ次にログインした時は監獄かね。《真偽判定》にでもかけられたら一発で余罪バレだ。

ちつ。もうちよつと早くこのゲームに出会えてたら、せめてエンブリオが戦闘系だったら、俺も上位層の連中みたいに、真っ当にこのゲームを楽しめてたのかねえ。

まあ、こんな性根の野郎から生まれるエンブリオだ、どれだけやり直しても結果は知れてるよな。

よお。あんたもカルディナ新規参入組かい？全く、ゲーマーっていうのはエンドコン
テンツを求めがちでいけねえ。そんなにすぐ所属国を鞍替えなんてして楽しいかい？
効率を求めたらそこにあるのは灰色の作業ばかりだぜ？

まあ、そんなことどうでも良いんだろうな。俺が仕掛けて、あんたが防いだ。じゃあ
後はお縄に付いて終わりってわけだ。

はいはい、さつさとその右手に持つ得物で俺の首でも跳ねてくれや。それでデスペナ
だ。

ちつ。こんなんで監獄行きとは、俺もついてねえな。

監獄所属 【盾巨人】 VI：ガーディアン・アームズ

監獄所属 【盾巨人】 VI：ガーディアン・アームズ

24時間というあまりにも長い虚無の時間。それはまさしく私にとって死の代償である。

いつもと同じように、あの世界に置いてこの身が不死であることに感謝し、そして時に嘆きながら過ごすその代償の時間は私にとってただ過ぎゆく時間ではなく、激情に染め上げられた精神を洗い流す時間であり、そして新鮮な憎しみを肉体に貯め込む時間である。

そうして現実から舞い戻った世界の空は、いつもと同じように憎たらしいほど晴れ渡っていた。

何をしても変わらない世界。何をしても前に進めない自分。

もはや見慣れた光景になったのだろう。リスボン地点に戻り、24時間と少し前と同じように看守に申し立てをする愚か者を見て反応する者は、もういない。

いずれにしてもこの身がすることは変わらない。

どれだけの視線に晒されようと、どれだけの思想に襲われようと、どれだけ否定されようと、この身がすることは変わらない。

この身に許された行動はもはや一つ。私が許す私に課した使命はあの悲劇を生み出した元凶に正義の鉄槌を与える。その唯一の望みがこの身を突き動かす。一步。足を動かすごとに身体の中に溜まった液体状の何かが揺れ動く。

その液体が由来するものは他でもない矮小な心の器から零れ落ちた悲哀の念だ。深く傷つき、胸に空いた真つ黒な穴からとめどなく流れ落ちる冷えた情を受け止めてしまった、自責の念と言うのもおこがましいほどに醜い澱みだ。

また一步。この身が着実に奴に近づいているという感覚が心を揺らす。

同時に24時間と少し前の光景が脳裏に蘇る。

夢の果てに見た幻想が。輝かしい未来が悪意に脅かされ、灰色の火の雨に焼き尽くされる。

写真が燃えるようにクシャクシャと記憶が縮小されていく、夢はそこにはないのだと、突きつけられた現実を直視することもかなわずこの身は朽ちていく。

灰毒の妄言が世界の理屈を書き換える。事実、思いだけではどうにもならない歴然とした格差があつた。

揺れ動く器から滴り落ちた悲哀の感情が大地に注がれる。

このせかいにかみはない

問題はこの身に宿る大地を構成する物質が既に常人のそれとはまるで違うことだ。一度封じ込めたはずの溶岩は冷えて固まるどころか幾度とか無くつき込まれる悪感情を燃料に温度を上げもがく。

燃え上がる大地の上に蓄積していく理想は、つまりものわかりが良いふりをする自分の心で、ガラスのように脆いそれは溶岩に溶かされてゆく。

どこまで蓄積しても、ガラスはガラス。隠すことなく熱を伝え、悲哀を蒸発させて分厚い膜を作る。

そうしたことを繰り返した膜は幾重にも層を作り、そうしてやがてつもりにも積もった思いはついに自重を支えきれなくなり、大きな雨粒を落とすのだ。

雨は濁流となり、この身の世界を洗い流そうとする。溶岩とガラスで作られた大地の端に積み上げられた石ころのような誇りと、腐り切った心根を飲み込んで土石流を作る。

爆発した感情は行き場を失い、心の弁を叩く。

それは叫びだ。前に進むふりしか出来ないこの身の叫びだ。

叫びを聞いてくれる人がいないことなんて知っている。

否、初めから誰かに聴いてほしくなどないのだ。

心が叫び続ける。いつか自分の手で必ずあの悪魔を討ち滅ぼすのだと言い切る。それだけが自分に最後に残された宿命なのだ。

ヤツを探し、求め、そして事実を知った。

あの悪魔は監獄に送られたぞと。

胸の扉は絶え間なく土砂に叩かれて、このままでは心が壊れてしまうのではないかと自分でわかるほど、すべてに拒絶されたような感覚だけが広がる。

どうすればこの身の果てにある幻想は戻るのだ、どうすれば自分は自分を許せるのだ。

いや、許すことなど許されない。

この身のありとあらゆる感情が燃え尽きるのが先か、余剰の思いを抱きかかえて失意の海に滲み消えるが先か。

もはや、手段を選ぶ道すら許されていなかった。

だから私は、アレを追うために犠牲を求めた。なあに、すでに誇りは雨に攫われた。

心根など、枯れ腐っていた。

死の大地を作り上げた、死者の山を築き上げたあのクソに鉄槌を。鉄槌を叩き込む。

心の奥底に溜まった悲哀の水溜まりをグツグツと沸き立たせる。

この身に宿るのは後にも先にもたった一つの思念だけだ。

己の全てを犠牲にしても成し遂げるとい意思。

奴の死を望む。

膨大な後悔に塗り固められた過去の己が、今日も首筋に手をかける。

どうしてこの身は不死なのか。

あの日、あの時、あの場所で見えた光景の全てが己の無力さを知らしめる。

そして今も。

何も出来ないことをわかっていながら、今日も奴の場所へと赴く。

命を賭して守りたいと思える人たちがいた。

豊かな土地に恵まれた国があった。

そう……あった。

沢山の人々が死んだ。国が一つ滅んだ。

絶えた。

絶やされた。

看守の承認が下りた。

いつもと同じように、アレのいる場所に運ばれる。

身体にまわりつく風が変わったのを感じる。もはや随分と慣れ親しんだ死の風に触れた事を理解する。

一步。足が前に進む。器の中身は既に空だ。一滴も残つちやいない。

この動力源はなんだ、嘆きか、恨みか、怒りか、憎しみか、悲しみか、絶望か。いいや、名の無い激情に過ぎない。

その激情が喉を切り裂きながらヤツの名を叫ぶ。

それだけが、唯一この身に出来ることだから。

どうせ、この身はあとわずかな時間で壊れてしまうのだから。

「キャンデイ・カーネイジイイイイイイイイイイイイイイイイイ」

叫び声が閉鎖された空間に反響する。死に犯された鼓膜が自らの殺意に耐え切れず

破れる。

だが、あの悪魔には届かない。羽虫の声など、届くはずがないのだと。当然のここのように、一蹴さえされない。

そしてまた。

奴の意識を削ぐことも敵わず、私は死んだ。

そしてまた。

安すぎる死の代償を待つ時間を過ごすのだ。

靈国所属 【死騎】 VI：アドバンス

靈国所属 【死騎】 VI：アドバンス

おはようございますですわ輝かしき世界！私の求めた最高の世界!!まあ、素敵！空を見上げれば煌めく星々が私を祝福していますわ！でも本当に残念。あの幸せを！満天の星々の祝福の数億倍も美しい幸福を手に入れたら現実の世界で24時間、こちらの世界では72時間も時間が経ってしまふなんて!!

でも、そうなのです。幸せとは十分に与えられないからこそ幸せなのです。私は存じておりますわ。謙虚な者にこそ本当の幸せが与えられるのです。

24時間前の幸せを思い返すだけで心臓がドキドキしてしまう。私の体の中にある脈打つ心臓がとても愛らしくて、そしてとても

もつたない。

どうしてこの心臓はまだ動いているのかしら。あの幸せを思い出すだけで体の芯からすくみ上るようなあの感覚が、ゾクリゾクリと肌を舐め廻しますの。ああ、早く感じたい。

でもだめですわ。まだダメ。一度為したらまた24時間も我慢しなくちゃならないんですもの。

どうせするなら最も刺激的な方法で、泣きたくなるほど、叫びたくなるほど、いいえ、ひよつとしたら声が出せないほどの刺激の方が気持ち良いかもしれないですわね!!

ああ、想像するだけで気絶してしまいそう。

今日はどうしましようか、昨日はお腹を空かせた狼さんがお相手でしたけど、もつと紳士的な人が良いですわね。ああ、そうだ!! 掲示板に情報が乗っていましたの。外れの方にとっても素敵な殿方がいらっしやるのでしたわ!!

血の通わない冷たい肉体の持ち主なら、きつと私のことを愛してくれるでしょう。

ああ、いかなくても、情報の通りならきつと私の望むようにいかせてくれるわ。

この世界はとつても素敵。だって死んでしまえるんですもの!

私、このゲームを始めるまで、死つて恐ろしいものだと思っていましたの。でも違つたのです!

知っていましたか? 首を絞められれば呼吸が出来なくなるんですよ。肺を冷たい手が握りしめるような感覚がして、全身が痺れて、目玉が飛び出しそうな息苦しさがやってきますの。脳みそが締め付けられるような気がしてきて、頭の中に心臓の脈動がガンガンと響いて、信じられないほど体が熱くなってきましたのよ!!

知っていませんか？血が流れすぎると身体が軽く感じますの。全身が宙に浮くような気がして、世界がゆっくりに見えるんですよ!!でも流れすぎると、あの美しい、魂が引き裂かれるような痛みが全然感じられないからあんまりオススメはしませんわね。

私が一番好きなのはやっぱり骨が折れるときでしょうか。特に腰辺りの骨が大好きです。痛みで声が出ないって本当にあるのだけれど、もつと痛くなると出したくなくとも声が出るものなのですわ。まあ声と言うよりも音と言う方が正しいかもしれないですけれど、獣みたいな、人間の尊厳を簡単に放り出せるようなそんな刺激が身体を襲うのです!!!

だからわたし、このジョブのことを知ったときは本当に感動しましたの。だって死んでしまっても幸せを感じる時間があるんですから!あの何も出来ない身体でHPのゲージが0になるのを恨めしく見る必要が無いんですもの。ええ、まさにアディショナルタイム!!試合が終わっても私の時間は終わりませんの!!

裸足で走れば足の裏から幸せを感じ、毒草を塗ればパンパンに膨らんで動かなくなるのだけれど、エンブリオを使って無理矢理にでも足を動かしますの。

ああ、幸せ!きつと今の私を誰かが見れば、赤い靴を履いた少女のようですわね!!

ほら、あつという間にたどり着きましたわ!!!

なんて素敵な殿方でしょう。身体の半分が腐り落ちているのかしら、きつととても痛

いのでしょね。でもわかりますわ！その幸せがあなたを動かすのでしょね！！さあ！私を殺して！ひどい目に合わせて！！ゆっくりとでも、がつついてでもどちらでも私はウエルカムですわ！！

ああ！！頭だけは取れないように気を付けなくちゃいけませんわね！！

リアルな身体だったら傷の一つでもつけようものなら婆やに鬼のように怒られますもの、だからこの世界でぐらい私の身体をめちやくちやにしてもらって！！そう、その鉤爪を私の柔らかな肌に突き刺しアア！！！！

素敵ですわ！最高ですわ！！綺麗な赤い血がドクドクと流れていきますの！だめよ勿体ない。流れ出るのならもつとゆっくりと流れて頂戴！！次はどこにしてくれるのかしら！！肩が良いかしら？噛みつきたくて仕方がなさそうですものね、ええ私は全てを差し出しますわ！だってそれが私の幸せなんですもの！！！！

凄いちから！！体中を雷が走り回っているみたいですよ！頭の奥がチカチカしはじめましてよく見えないのですけれど！ああ！！ブチリブチリと音を立てて肩先が剥ぎ取られましたわ！！折れた骨の断面は綺麗な黒い色をしていますのよ！表面と合わせてモノトーンでもきれいな色！それでいてピンク色の肉が隙間なくツイているのを見るとなんだが不思議な感じですよわね。あれはもうわたしであって私でなくなりましたの！！でも私はここに生きていますの！！

黄河所属 【大盗賊】 VI：ラビリンス

黄河所属 【大盗賊】 VI：ラビリンス

流されるまま生きることの何が悪いことだろうか。

自分で何かを選択することの恐ろしさを想像するだけで、胸が鎖で雁字搦めになる。責任を負いたくないのは誰だってそうだ。だからこそ、僕は何をするのにも誰かの意見を求める。そして、そんな自分が恨めしくて仕方がない。

だからだろうか。この世界が本当の意味で自由なのだと知ったとき、僕は知らず知らずのうちに開けてはいけない扉を開けてしまっていたのだろうか。

この世界でどんなことをしでかしても、現実世界の僕は何も害を被らない。自分の安全が保障された状態であれば、僕はなんだって出来るのだと、その時はじめて知った。

この世界にいれば、僕は勇気が湧いてくる。僕は英雄にでも、魔王にでも、王にでも奴隷にでも、善人にでも悪人にでもなんにでもなれるのだと。出来ないことは無いのだと。もちろん困難ではあるかもしれないが、それでも最初が一番高い壁を乗り越えた先は間違いなく自由な世界だ。

始めにやったのは窃盗だったと思う。【盗賊】という文字に魅かれた僕はジョブに着くや否や知らない人から盗みを働いた。

現実では絶対に出来ないことだ。

だって、リスクが高すぎる。それに、もし成功したとしても、それが永遠にバレないでいる保証なんて塵に一つも無い。一度やってしまえば、後の人生ずっと、バレないかどうか怯えながら暮らすことになるだろう。

でも、この世界ではそんなことを気にしなくて良い。むしろ【盗賊】なんてジョブがある時点で、公式が盗みを推奨しているみたいなものだ。

そう。僕は悪くない。ルールに則って遊んでいるだけだ。

寝ぐせのようなものだ。一度付いてしまえば、それを直すのは難しい。曲がり曲がった心根という寝ぐせは、そのまま個性として定着していた。

窃盗。殺傷。強盗。殺人。不思議なことに一つのハードルを乗り越えるたびに、僕の中で次の行動に対する欲求が広がる。次は何をしようか。他にこの世界でしか出来ないことは無いだろうか。今まで何一つ為せなかったことへの反動か、それとも、やりたいうことが出来る素晴らしい自分に対する期待なのかはわからないが、そうした欲求が雪

だるま式に大きくなっていった。

そうして、一度付いた汚れを洗い流すのははや不可能となっていた。悪事と言う名の泥で汚れた僕の四肢はもう自分のものではなくなくなってしまったようで、もう自分の意志では止められなくなってしまっていた。

それは間違いなく僕自身が求めていたものはずだった。

自分で意思決定をせず、ただ流されるままに事を為す。

僕が行っていることはこの腕が勝手にやっていることで、そこに僕の意味は存在していない。そう言い切れてしまうほど、この腕が為す惨劇を止める術を僕は持たなかったのだから。

でも、この世界を出れば大丈夫。そう思っていた。

現実の僕にはエンブリオは付いていないし、おぞましい犯罪者のジョブにも付いていない。

そのはずだ……

どうかしているのだと思う。いや、そうに違いない。本当の僕は臆病なのだから。虫

も殺せないような存在なのだから。大それたことなんて出来るはずがないのだから。

部屋の中を買った覚えのない商品が無数に散らばっているのだから、今の僕はデンドロの世界にいるんだよね？

天地所属 【影】 V : エルダーアームズ

天地所属 【影】 VI : エルダーアームズ

あの日、目の前の友人は、その右手に握った彼の相棒の切っ先に深紅の液体が流れていくのを、他人事のように眺めていた。

当事者であることを理解すれば、心が壊れてしまうからだ、俺は思う。両の腕をだらりと垂れ下げて立ち尽くす姿は、まるで枯れ木だった。

彼の足元に横たわった少女は右肩から袈裟掛けに斬られ、光を映さぬ双眸と、どどめ色の唇が彼女の容態を如実に物語っていた。

膨らんだ後悔を映したような色の空から細かい雨がぐずつきはじめても、彼は立ち尽くしたままだった。

二人が出会ったのは半年も前になるだろうか。山に出た純竜級モンスターの討伐がきつかけだった。

方や武家屋敷の一人娘。方や瘋癲名乗りの流浪人。共に得物に命を預ける道を選ん

だ、この国ではよく見る人種だった。

居合わせた俺が言うのもなんだが、まさしく星の導きだったのだろう。どちらか一方でも欠けていけば、あの山で命を落としていたかもしれない。

その一件以降、二人は連れ立って行動を共にしていた。といつても、男勝りにして負けず嫌いの彼女が彼を逃がさなかったというのが正しかっただろう。

決して近づくことはないが、離れることも無い。轍のような二人だった。

俺が屋敷を訪れるときは決まって彼女が彼に立ち合いを申し込んでおり、彼はそれから逃げ回っていた。俺を含め屋敷に仕えていた他の武士たちも、彼が屋敷を去らずにいることから、ある程度のことには察している。

ただ一人、彼女の父親だけは一人娘のことゆえ気が気でなかったようだが、それでも、彼のことを信頼していたように思う。

そうして同じ時を同じ場所で過ごすうちに、二人の関係は一言で表せられないようなものになっていった。

山賊が出たと知らせを聞けば、誰よりも先に討伐に向かう彼女と、それを支える彼の屋敷の警備という建前もあるが、悔しいことに俺を含めた他の者たちは誰もあの二人に付いていけなかった。

レベルキャップである500に到達した二人とステータスの面では差異がないはず

なのに、否、それゆえに才能がモノを言う。同じステータスであれば、戦闘センスの優れたものに軍配が上がるのが道理ということだ。

それでも、悲しいかな。どれだけ強くても、どうしようもないこともあるのだと。思いついた結果が、あの惨状なのだ。

誰も悪くなど無い。ただ、彼には役割があった。というだけだ。屋敷を奇襲する為の間者という役割が。

彼には家族がいた。流浪人というていで忍び込むために元々の主人の屋敷に置いてきたが、それは等しく人質であった。

きつと、彼はどうすれば良いのかわからなかったのだろう。本当はあの日、彼女に殺されるつもりだった。だが、染み付いた性分がそれを許さなかった。激情に揺らぐ彼女の太刀筋では、彼を殺しきることが出来なかったのだ。

そうしてくたびり損ねた友人が、今、俺の前にいる。

頼むと。その為にお前を連れてきたのだと。彼は俺に懇願する。

俺は役割を果たしたのだから、お前もお前の役割を果たしてくれないかと。

その手で俺を殺してくれないかと。

反吐が出そうだ。他でもない自分自身の在り方が、役割が、よりにもよってこれなのかと。

俺の裏に蘇るのは楽しげに笑う彼女と彼の姿。そして、屋敷で彼の帰りを待つ妻と子供の姿。

アンタは、アレを守るために、アレを犠牲にしたんじゃねえのかと。そのつもりであの屋敷にいたんじゃねえのかと。

だったら、なんであの場所で刀を捨てなかったんだと。彼女は本当に心からアンタのことを思っていたのに、その気持ちを裏切って殺しちまった挙句が死にたいなんて、ふざけたことを抜かすんじゃねえよと。

子供みたいに泣きじゃくる男の姿を見てるといたたまれなくなつて、とうとう俺はその場を飛び出し、野を、山を、走り、走つても、どれだけ走り続けても、それでも

ぐずついた空は決して俺を逃してはくれなかった。

砂国所属 【司教】 V : テリトリー

砂国所属 【司教】 V : テリトリー

炸裂音が鼓膜を揺らす。ファンタジーな世界観らしからぬ火薬由来の爆発が砂を巻き上げ、討伐リストの数字が一つ増える。

これで80か。一体いつになれば進化してくれるのだろうか、左手に宿る相棒を見つめる。こんな雑魚狩りばかりじゃあエンブリオの成長要素としては認めてもらえないのだろうか。何かイベントに参加しなくてはと考えていると、宿を出るときに小耳に挟んだ話題を思い出した。

また、戦争が起こるらしい。

話していたマスターたちは俺と同時期にこの国に移り変わった面子だった。そういう意味では、ある意味信用ができる。俺もそうだが、おかしなことに国を移り変わった今の方が王国に情勢に詳しいというマスターは少なくない。

見捨てたというのは人間が悪いが、事実そうなのだろう。同郷のマスターたちは自分たちのことを卑下して自ら裏切り者と称する。

それはつまるところ贖罪の意思なのだろう。敗戦の故郷を見捨てたという後ろめたさが。情緒を吐き捨てて利益を優先した極度の利己性が。彼らに罪人の仮面を被らせているのだ。

それでもだ。俺にも俺なりの道理はある。王国は皇国と違って俺たちマスターのことを少しも考えてくれなかった。別に報酬がないから参加しなかったわけじゃない。俺はそこまで対人戦に向いてるエンブリオじゃなかったからむしろ皇国みたいなやり方だと逆に損を食うぐらいだ。ただ、消費したアイテムの補填や、デスペナ時のランダムドロップの保証ぐらいは面倒見るべきなんじゃないのかっていう。そういうプレイヤーとして真つ当な意見があったただけだ。

そういう考えの奴が多かったから、それに、超級の連中だって参加しなかったわけだし、いくら「大賢者」がいても敗戦の気が強かったし、そんな状況でわざわざ時間割いてまで参加するなんて馬鹿みたいじゃないか。

だから俺は、あの戦争に参加しなくてよかったと思ってるよ。

……わかってるそれが無理やりすぎる自己肯定だつてことくらい。だけど、そうでもないし、自分の選択ぐらい責任もたないと。仮面の内側の涙なんて、見せるわけにはいかないじゃないか。

ただ、次の戦争はどうだろうな。今も王国にいるマスターたちが皇国についてどう考えてるか。それはまぎれもない侵略者だ。

俺みたいな愛着もなんもない奴らは全員見切りをつけて出ちまった。だから、そういう意味で言えば今も王国にいるマスターたちは、強い。

それは別に実績だとかプレイヤースキルだとかの問題じゃあない。ようするに心の在り方だ。

俺たちとは比べ物にならないという強さが、あの国には残っている。

それはもう、どうあがいても手に入れることのできないもので、どうしようもなく眩しく映る。

もしも、あの時、くだらない理由を踏みつぶして戦争に参加していたら。賢しいふりをせずにあの国に残っていたら、俺もあの輝きの中に居られただろうか。

外し方を忘れた仮面から見るとの故郷は嫌になるくらい眩しくて、その輝きに胸の内が燻ぶられた。

海国所属

海国所属

〔 0 : 〕

まずい。これは相当にまずい奴だ。これだからリアルすぎるゲームっていうのには忌避感があったんだよちくしょう。

俺、いまだここにいるんだよ。

チュートリアルで、でっかい船の姿を見たときにめちやくちやくわくわくしたもんだけどさ、実際に入ってみると、まあ迷う。どうしよう、知り合いなんかいないし、そもそも誰に声かけたらいいのかすらさっぱりわかんねえ。道教えてくれるNPCとかいないの？

もしくはスタート地点まで戻るボタンとかさ。いやあ、マジでどうしたらいいんだこれ。

合板仕上げの通路を当てもなく歩き続けるが、なんか記号と数字の看板ばかりで、ここがどこで、どこに行ったらいいのかさっぱりわかんねえ。

一応マップは開いてるけど、これがさっぱり見方がわからねえ。ていうか上下に階層

が入り組んでるせいで位置がわかりづらいんだよ。参ったなあ、どうしようこれ。

とにかく誰か、誰か人を探さないと。いやまてよ、そういえばここに来る途中に黄色と黒のボーダーみたいなのを何回も見たけどさ、居ていいところなんだよな？「そこのなををしている！」みたいな展開にはならないよな、大丈夫だよな。

やだよお、心細せよお。

このままずっとさまよい続けるのかなあ、うわ、なんで今タイタニツクのこと思い出したんだろ、やめろよ俺、水なんか入ってきたら絶対死んじゃうじゃん。

あー、なんか腹も減ってきた。どうしたらいいんだろう、食べ物も欲しい、でもそのためには店があるところに行かないといけないわけで、あー詰んでる！開始早々詰みかけてんぞ！

ひもじいよお、帰りたいよお、もうやめようかなこのゲーム。歩くのも疲れてきたしよ、もういやだあ、でも開始早々引退とかめつちや恥ずかしいし知り合い知られたら自殺もんだ。

あれ、そうか死ねばいいんだ。死んだらセーブポイントのところに戻るらしいし、最悪チュートリアルで手に入ったこのナイフを使って自殺したらいいのか。

そういえばチュートリアルするとき他に色々説明された気がするけど、なんだっけ

か。ログアウト？だめだ、ちゃんと聞いとときやよかった。でもどうせちゃんと聞いてても今の状況をなんとかできるわけないから無駄だよなあ。

うお!?なんだ、急に左手が光って！あ！エンブリオ!!そうじゃねえかエンブリオ!!なあおい！助けてくれよ！お前にどんな力があるか知らねえが、今まさにピンチなんだ！さあ！頼んだぜ！俺の相棒!!!

無所属 【黒土術師】 V：ガードナー・チャリオッツ

無所属 【黒土術師】 V：ガードナー・チャリオッツ

正体のわからない焦燥に駆られ、逃げるように天を仰ぎますと、雲一つない鮮明な黄昏色に沈む空がありました。気の早い幾つかの星々があちこちに煌めいています。

もしも望んだ記憶を永遠に忘れることができるのなら、その行為はどれだけ罪深いことでしょうか。

夜空のカーテンが昼の世界を包み隠してしまうように、そつと記憶に包み隠せないものかと、子供染みた考えが浮かび上がります。

忘れたい記憶があります。誰にだってあるでしょうけど、私にとつてのソレは形容し難くそして耐え難いものであり、楔のように私の心をあのときの感情から逃がしてくれません。

喉の奥にへばり付いた後悔は吸えど吐けどなびくことなし。息苦しさだけが訴えかけます。もう無理です。このままでは心が死んでしまいます。

あの惨劇を忘れない。もう一度何も思うことなく純粹に世界を楽しみたいと、恥知らずな顔で膨れ上がる欲求の隣には、惨劇を思い出すたびに肥大化する腫瘍みたいな後悔があります。このままでは近いうちに窒息してしまおうでしょう。

自らに許しを請うことのなんと愚かなことでしょうか。償う仕方すらわからない咎人の嘆きを聞き入れてくれる人はどこにもいません。

もう一度初めからなんて。やり直すことなど出来る道理すら存在しません。今も昔も、無力な私に出来ることなど、何一つ残されていないのです。

間違っていたのはきつと初めからです。ほんの息抜きのもりで、遊びのもりでこの世界に足を踏み入れたときから。そういう心積もりでいたこと自体が間違っていたのでしよう。

もう、今の私には何かを為すことなんて出来やしない。何かに関わることがもう恐ろしくて堪らない。かといって、全てから目をそらして逃げてしまうことも難しい。私は

弱くて、底なしに愚かです。

陽が完全に沈み、ゆっくりと身体の熱が奪われていくのを感じます。

もうどうとでもよくなってきました。吹っ切れたというわけではありませんが、冷えて静かになった頭が出した結論は、まさしく欠片も熱を持たない答えでした。



告白いたします。

私は大きな失敗をしました。弱小クランでしたけど、メンバー全員で挑んだ護衛クエストに失敗したというのは、それはそれはひどい傷となりました。すべて私の不徳の致すところでした。一人二人と去っていくメンバーを見届けた後、オーナーである私が出たので、あのクランはもう影も形も残っていないでしょう。

告白いたします。

あのとこの私たちには何もかもが足りていませんでした。力も、覚悟も、心意気も。そして、今のこの身にもそれは宿っておりません。

あのときから一つも変わらない。進みもせず、戻りもせず。それでも居続けるのはただの私の自己満足です。

告白いたします。

痛む胸を押さえ、わずかな酸素を後生大事に生き続けるのはもはや限界になりました。

そして気づいたのです。私に出来ることは一つも残されていないとしても、選ぶ権利までは奪われていないのだと。

私は他の何者でもなく私のために、私が生き続けられるためだけに、それを選択しました。

告白いたします。

街から東に4000メートルいったところに古い砦がありました。

告白いたします。

名前も知らない人でしたが、古今東西あのような場所にいるのはよろしくないことをする人たちに決まっています。

告白いたします。

相手がティアンといえども、流石に一人で大勢を相手にするのは無理があり、半分ほど仕留めたところで私は死んでしまいました。

告白いたします。

すべては未来の私を救うためのことです。過去の私を殺した今の私が死ぬことで、未来の私を生かすのです。

告白いたしました。

もしも都合がつかまりましたのなら、砦の中の様子を確認してください。もう少しして心の整理が終われば私も行きますが、しばらく時間がかかりそうです。それでは、失礼いたします。

皇国所属 【装甲操縦士】 IV：キャツスル

皇国所属 【装甲操縦士】 IV：キャツスル

元々飽きっぽい性格ではあったんだ。何かを始めてみてもほんの少しの壁にぶち当たただけで嫌になってしまったり、自分より才能のある奴らと比べた瞬間に全てがどうでもよくなってしまうていた。

その結果、良い年をして何も持ち得ない醜く太った肉塊と化した。自業自得とは俺のことだ。

自己肯定などできるはずもなく、むしろ自ら進んで否定するありさま。俺ほどに愚かな人間は、、、きつと吐いて捨てるほどいるのだろう。底辺の中ですら特別でもなんでもない、ゴキブリ以下の存在だ。

そうして、その日暮らしのおよそ文化的とは到底言えない生活の中を這いずりながら辛うじて生きながらえているときのことだ。夢のような、嘘みたいなゲームの話聞いた。それが俺の人生を変えてくれるのだと、神が施した救済の道標だと信じて、俺はデ

ンドロ口を手を取った。

けれど、やっぱりそれは嘘だった。

マスターとかいうよくわからない扱いをされて、ひどく金のかかる装備品を掴まされて、しかもいつの間に所属国は貧乏になつて、戦争がはじまるというから意気込んでみたけど参加資格が足りないだなんて言われて。

理不尽だ、、、不満しかない。

極めつけは周囲のプレイヤーたちから努力してないとか、やる気がないならクエストの邪魔をするなどか言われて、、、現実よりも冷たい扱いを経験するなんて想像したこともなかった。

堪える、、、どうして誰も助けられないのか。俺に機会を与えてくれた神様はどうして導いてくれないのか。みんな、生きること自体が罪とでもいうように、辛辣な態度で槍みたいに貫いてくる。

もう何もかもが嫌になる。人生の全てを変えてくれるような何かを期待したのに、結局のところ俺が立っているところは以前と変わらない何者にも成れない荒野だった。

弱いっていうのはつれえなあ、、、

ダメって言うのはどうしようもねえなあ、、、

頼り方すらわからねえって言うのはどうしようもねえなあ、、、

いつそのこと、、、山賊にでも身を費やしちまうか、、、

でもほら、、、うちの国ってば貧乏だし、、、山賊なんかやつても割に合わねえよなあ、、、

こんなデクノボーみたいなエンブリオじゃあ別の国に行くのにも使えねえし、、、このまま国が滅んでいくのを見ていくしかないのかねえ、、、

まあ、ほらなんだ。俺みたいな能無しに出来ることなんてさ、、、元の世界でもこっちの世界でも限られてるってわけだ。

それがわかったただけでも、デンドロをやった意味があつたのかもしれない。あと少ししたら二回目の戦争が始まるみたいだし、、、それを見届けるまではやり続けてみるとしよう。

どうせ、結果がどうなろうと、俺には関係ないんだらうけどさ。

黄河所属 【高位召喚師】 V : ルール

黄河所属 【高位召喚師】 V : ルール

趣味にかまけて仕事をおろそかにする人ってどう思います？

自分はそういうだらしない人のこと、嫌いだったんですよね。

職場にもいたんですよ、休憩時間とかにヘッドセットつけてデンドロデンドローって。

いやいや流石にそれはヤバいでしょうって、本社の人に見つかったらどうするんですか。って言ったことあるんですけどね、なんか村が気になるとか、シフト制だからとか言い逃れして、わけわかんないでしょ。

でもね、まあ別に仕事で下手をするとかはなかったんで上司も何も言わなかったんですけど、見てるこつちとしてはハラハラするしモチベ下がるし、勘弁してくれよって感じでしたね。

でもまあ、そんなに夢中になるようなゲームってどんなのだろうって、その人が理由

でデンドロを始めたのは間違いないですよね。

びつくりしましたよ、だって風とか匂いとか温度とか、もうありとあらゆる感覚が現実さながらですからね。オフィスにいなながら旅行してるみたいなものじゃないですか。だからまあ、リフレッシュ的な感じにするのならまあ良いのかなって、最初はそう思いました。

その問題の人、実はとても親身な人でしてね、仕事でもそうなんですけど、デンドロでも色々教えてもらいましたよ。

おススメの店とか、狩場とか、ジョブの組み合わせとか。一から十までなんでも教えてもらいました。

誰かを助けるのが生きがいなんですって。今になって考えてみたら、だからこそメイデンのマスターだったんですかねえ。

……だからこそ、なんでしょうかね。

ある日、突然その人が長期休暇を取ることになりましたね、まあ珍しいことじゃないし、貯まった有休を消費するのも必要ですし、そんなもんなあと思ってたんですよ。

でもね、長期休暇がどうにも終わらない。かと思っていたら、いつの間にか長期休暇だったはずが休職になって、そして気が付いたら、もう半年が経ってました。

あの人に何があったのか。私は聞くことが出来ませんでした。

デンドロにログインしても、フレンドリストが光っているだけでどこにいるのかもわからない。

最後の手段としてDINで情報をもらいに行っただけですけどね、無名のマスターの名前を挙げたところが入ってくる情報なんか欠片もなくです。それこそそんなことは知っている、っていう情報ばかりです。

あの人がこの世界で一体何をしていたのか。そして、今どうしているのか。仕事に戻ってくるつもりはあるのか。相談できる人はいるのか。そんなことばかり考えてしまう。

色んな感情が渦巻きますよね、リアルでも、この世界でも良くしてくれた人が相手なら、なおさら。

不思議なものでしてね、あれだけ仕事中にデンドロをしていたあの人のことを。はた目から見れば仕事をおろそかにしていたあの人のことを。わけわかんないと思っ

たあの人のこと、仕事の合間の休みを見つけて自分は探しているんですよ。

自分が嫌いだった、だらしない人そのものになってしまつてて笑えないんですが、でもきつと自分がこうしてあの人を探しているのと同じぐらい、あの人にとってデンド口は大事なものだつたんだらうなつて。

そういうのがちよつとだけわかつたのは幸せなことですかね。

あの人を見つけたら何を話しましょうか、なんて声をかけましょうか。前みたいに、少し困り顔で首をかしげながら返事をしてくれますかね。

お元気ですか。うーん。少し違うなあ。

大丈夫ですか。重苦しいなあ。

探しましたよ。……直球過ぎる。

でもまあ、きつと出会つたら出会つたで自然と言葉が出てくると思うんですよ、もしかしたら泣いちゃって話すことも出来ないかもしれないですけど。そのときにならないとわからないですし。

私がデンドロをしている理由は、
だいたいそんな感じですよ。

無所属 【大狩人】 V : ギア

無所属 【大狩人】 V : ギア

冷やかな談笑が鼓膜を揺らす。酒気を帯びた粘りのある空気が肺を犯し、骨の髄から熱を奪う。

賑やかな雰囲気にもかかわらず俺の心はどこまでも独りだ。

失くしたものを埋めるためか、酒場やギルドに賑わいを求めに寄せられるが取り戻せない現実に苛まれる始末はまさしく灯取虫と言えるだろう。

およそ穢れを知りえぬ彼らの傍に自分のようなものがあることが大罪のように思い、疼く右手を押さえつけ静かにその場を去る。

虫の声一つ聞こえない暗黒の中にこそ俺の居場所はある。伸ばした己が手も見えぬほどの光なき夜。

それは月の生まれ変わる夜だと教えてくれたのは誰だったか。失えた過去が脳に反響し、幻聴が鼓膜にへばり付く。

それは毒だ。世界中のどんなものよりも邪悪な毒だ。そうとわかっていても逃れる

ことなどできない。捕らわれた蝶のように毒に侵されて魂が壊されるのをただ待ちわびる。

疼く右手を固く握りしめたまま、俺はゆっくりと暗黒の過去へと意識を落とした。

「伸ばした右手の先に人の手で出来た壁。全てを掴むことは難しくとも誰か一人ならなんとか救えた。そしてそうすることで己自身を救ってもらえただろうに」

都市部から離れた辺鄙の村。山賊、モンスター、奴隷商、疫病、ありとあらゆる脅威にさらされながらも、そこに住む人たちは強くたくましく、そして何よりも温かかった。人付き合いが苦手な周囲と上手く馴染めなかった俺にとってその村の人たちは本当に特別で、仮に彼らが俺のことを脅威から村を守るための道具と割り切っていたとしても、いいやそんなことは断じてあり得ないのだが、俺には嬉しかった。

垂らされた蜘蛛の糸ではないが事実俺はその関係に縋っていた。

イモ洗いが得意だったおばさんと料理好きなその娘。酒造りの名人爺さん。金勘定

の得意な少年。木工細工師のおっちゃんも村一番の歌い手の嫁さん。

他にもたくさんの人たちが力を合わせて生活をしていた。

誰かが病気になるれば村中で看病する。誰かが恋をしたなら村中で行く末を見守る。そう。あの村はきつとあの人たちだけで十分うまく行つてたんだ。

それを、俺たち余所者がぶち壊した。

規律正しく連携の取れたミツバチの群れがあつたとして、そこにハチモドキが入ればどうなるか。秩序は崩壊し、混乱が熱病となつて群れ全体を覆いつくす。

俺たちがやったことは、つまりそういうことだ。力のあるマスター、頼りになるマスター、金と道具を持つてきてくれるマスター。

美しい均衡のとれた村は一瞬で崩れ去りその隙間を欲が跋扈する。詰みあがらない煉瓦。埋まらない溝。人が人であるかぎり生まれる軋轢の針が村人の善性を突き殺した。

おれはただ、良い村があるとみんなに知ってもらいたくて、掲示板に書き込んだだけだったのに。その許されがたい愚かな厚かましい善意によって、俺の愛した村は姿を変えた。

元々裕福な村ではなかった。特産品があるわけでもなく、狩場としても不安定で何かの拍子で何時消えてもおかしくないような村だった。

そんな村にマスターが常駐すれば、今までと違って歪みが生じるに決まっている。

必要以上にマスターを頼り、マスターにおべつかをかいてほかの村人を出し抜こうと躍起になる。村人はどんどんと不仲になり、およそ村といえるような体制は蜻蛉の一夜の如くなくなっていた。

そして、そんな村人たちに嫌気がさしたのか、それとも単純に飽きたのか。常駐していたマスターたちは忽然と姿を消した。

独り、俺を残して。

けれど俺は心底ホツとしていた。マスターたちがいなくなれば、村は元に戻ると俺は思っていたんだ。今になって考えると、それは愚かに過ぎた考えだった。

独り残した俺を見つめる村人たち。意地の悪そうにガラス玉ほど眼をランランと輝かせ、黄ばんだ歯を見せつけるように笑う。

彼らに俺の姿はどう映っていたのだろう、少なくともそれは同じ生き物を見る目では

なかった。珍獣でも、いいや、金を、いいやどちらもふさわしくない。そう、あれは獲物を見るような目だ。感情を感じられず、意思の疎通ができるとは到底思えない類の、例えるなら……そう、蟲の目だ。

おばさんも、娘も、爺さんも、少年も、おつちゃんも、嫁さんも。

皆がみんな、蟲の目で俺を見る。

寄越せと、働けと、金になれと、媚びた笑顔を振りまきながら、蟲惑の花を食い尽くそうと振る舞う。

毒だ。この村は毒に侵されてしまった。

そしてその毒を運んだのは紛れもない俺だ。

毒に侵されたのなら、刈り取らなくてはならない。けれど俺にはそれが出来なかった。毒を運んだ責任を、俺は果たす覚悟を持ってなかった。

伸ばされた村人の手を誰一人掴むことなく俺は村を後にした。

優しい思い出は黒い思い出に塗りつぶされてしまい、美しさを思い返すことも難し

い。幸せを運ぶミツバチになれないモドキは、あの時どうするのが正解だったのだろうか。か。

そんな答え。聞いたところで今更どうしようもない。

それでも、村を出るときに村人に掴まれた右手が今も疼く。あの差し出された手を払いのけてしまった瞬間の彼らの表情が忘れられない。あの蟲の目が、今も俺をどこから覗き込んでいるような気がして恐ろしい。

俺が臆病だったから、俺が正しくあれなかつたから。俺の、俺が、彼らを蟲にしてしまったのだと。蟲にも劣る魂性が、こんじよう無しが、一人前に憤りを感じているのが心底惨めで、なによりも軽蔑する。

どれだけ嘆いたところで、もうあの村は元に戻れないだろう。少なくとも、俺が、マスターがああ村に入ってしまったえば、それを観測することは出来ない。もう、どうしようもないのだ。

「ひとりむしかえすこともなくくらやみのふちにしずめばくもらずはえるのか」

願わくば、彼らが物言わぬ蛹となり、再び正しく春を迎えられていることを、疼く右手にかけて祈っています。

監獄所属 【暗殺者】Ⅲ：キャツスル

監獄所属 【暗殺者】Ⅲ：キャツスル

描けない

かけない

カケナイ

カケナイカケナイカケナイカケナイカケナイ……

意識する。腕が動く。脳が描いた残影の通りに筆が軌跡をたどる。

それがどれだけ特別なことなのか、蘇った利き手の感覚に涙し、かつて運命に呪詛を
蒔いた唇からはあつさりと感謝と愛が零れた。

不幸にも事故に合い、命には別状なかったものの後遺症で利き手にマヒが残ったことで、私の夢は……幼いころからの画家になるという夢は一度頓挫した。

もちろん、利き手のマヒ程度なら技術の進歩でいくらでも代用は効く時代だ。逆の手で練習をすれば済む話でもあるし、なんならロボットアームを使いこなしてもいい。

実際、そうして夢を叶えた画家はたくさんいるし、いやらしい話だが付与価値の付いた作品というのは注目されるものだ。

けれど、そうじゃない。あの自分の意思をそのまま具現化するような、筆と己が一体となるような、腕と筆だけを残して自分の存在が希薄になっていくあの感覚を取り戻すことはもうないのだと、そういう事実には私は筆を折らざるを得なかった。

別段、特別な才能があるわけでもないのだ。大きな賞を取ったわけでもなく、掃いて捨てるような凡才に過ぎない私のようなものが絵を描き続けていたのは、その一体感に魅了されてのことだった。時間を忘れ、腕が思うがままに筆を動かす、精根尽き果てるまで描き続けられたのは絵を描くことの楽しさを私の腕が覚えていたからだ。

けれどそれを味わうことは二度とない。そう思っていた。へ In finite De
ndrogram)に出会うまでは……

デンドロを紹介してくれたのは病院の先生だった。絵を描けなくなった私のケアに両親がカウンセリングを依頼していたのだ。

初めて言われたときは愚かにも先生のことを軽蔑した。VRに希望を求めるなんて夢物語にしても滑稽だし、なによりみすぼらしく歪な幻想すぎて、自分がそこまで堕ちたのかと、事実を受け止めるだけの余裕もなかったからだ。

けれど、渡されたヘッドギアでチュートリアルを受けると、そんな考えは一瞬で吹き飛んだ。

全てが、私が失ったと思っていた全てがそこにはあった。震えない腕、軋まない心、輝く世界。〈Infinite Dendrogram〉は紛れもなく私のための現実だった。

両親の行動は早かった。病院からの帰りに購入してもらったヘッドギアを卵のように大切に抱きかかえながらの帰路は私の人生の中で一番心躍る時間だった。

そうして私は理想の世界を「絵師」として歩み始めた。

それほど多くない所持金を工面して画材を買い、自由な世界で絵に没頭する。

親切な人に教えてもらった【絵師】の組合に仕事を斡旋してもらい、食うのに苦労しない程度には生活の目途も立った。

それは紛れもなく私のための世界だった。

決して綻ぶことのない線を紡ぎ続ける毎日。絵に自分の全てを懸けることのできる世界。

二日目に芽生えたアトリエを模したエンブリオのおかげで住居に困ることもなく、この身の全てを絵に注げる生活。

この世界にある全てを描きたい、そんな途方もない夢を純粹に思い描くほどに私の心は輝いていた。

振るう腕は心を語る。柔らかな筆先から伝わる至上の喜びを全身で受け止める。

上手でも下手でも関係ない、私の真つ白なキャンバスを埋め尽くすほどの純然たる理想が詰め込めた世界。行き過ぎた喜の感情を捨て去ることすら難しく、ならばそれを飲み込むほどの作品を描こう。そんな世界。

気分転換に街の画材屋に立ち寄り、高価な画材を目の前に貯金を決意したり、筆制作の職人技に感銘を受けたり、展覧会に立ち寄っては様々な技法を学んだり。かつての現実では得られなかった絵に携わる友人も多数出来た。

絵画だけでなく、他の芸術作品にも興味が湧いたので色んなアトリエにお邪魔しに行ったりもした。

この世界の芸術は本当に素晴らしい。どんな作家も自分の心血を注いで作品に立ち向かっている。一に生活、二に生活と資金に追われて色褪せた作家の多い現実とは比べ物にならないほど鮮明な芸術の輝きに満ちている。

同い年ぐらいの【絵師】の作品を見るたびに、私も負けてられないという強い意志が生まれ、アトリエに籠っては作品作りに没頭する。

積み重ねた研鑽が50という数字に変わり、【絵師】のほかに【彫刻家】の道にも進み、先人たちの【芸術家】を目指して日夜問わずデンドロ口に入り浸る。

久しぶりに顔を合わせたカウンセリングの先生からも良好な状態を告げられたので両親も安心してデンドロ口をする私を応援してくれた。

現実世界に出力した私の作品を両親にプレゼントしたこともあった。

今までと比べ物にならないほど大きくて技術も成長したから驚いていたけれど、心の底から喜んでくれていたと思う。

デンドロ口に出会えて、私は本当に幸せでした。

彼に出会うまでは

それはいつも通りの朝。アトリエであるエンブリオの窓から差し込んだ朝日に気付いて私は腕を止めた。

この世界でおよそ16時間、現実世界に換算すれば5時間と少ししか経っていない。まだ現実の体調を告げるアナウンスは無いが、アバターの身体は空腹を告げていた。

いつもの宿屋で朝食でもご馳走になろうかと、強張った身体にムチ打ちながらこの数か月ですっかり仲良くなつたティアンの店を目指す。

朝の澄んだ空気は火照った脳と身体を優しく冷まし軽やかな気持ちへと変えてくれる。

こここのところどうにも伸び悩んでいるところだ。数か月前はそれこそもう一度描け

るようになった喜びや、この世界の新鮮さから無限の幸せを感じていたが、喉元過ぎればなんとやら。多くの作家と同じように、私は壁に悩まされていた。

描きたいものがわからなくなっていくような、目の前がどんどん狭まっていくような。理由もわからない窮屈さを感じ、己の不出来さに辟易する毎日。

アトリエに籠るのは現実と向き合いたくないからだ。鮮やかな世界に比べて自分がどれほどちつぽけで惨めな存在かを受け止めたくない。

一度夢を諦めるような境遇から立ち上がったにしては私はそれを作品に込められていない。

どこまで行っても所詮は凡才。それはずっと前から分かっていたのだが、それでも自分の都合の良い現実がやってきたため運命に愛されているのだと錯覚していたのだ。

足りない。何かを乗り越えなくてはならない、けれどそれが何かわからない。組合に所属する同期の作品を見るたびに己の才覚のなさに直面し、そして張り付けた嘘の顔で「絵が好きだから、描けるだけで幸せなんだ」と吹聴する我が身が情けなくて仕方ない。

宿屋にやってきた。慣れた様子で勝手口から侵入し、朝食の準備に取り掛かっている宿屋の主に挨拶をする。

案内されたテーブルに向かうと、馴染みの顔がそこにあった。組合に属する鳴かず飛

ばずの作家たちが一堂に会して朝食を待ち望んでいる様子は餌を待つ雛鳥のようかわいらしく、そして意地汚い。

威勢のいい声と共に運ばれてきた朝食。大袈裟に声を上げて食べていく友人たちを横目に見ながら、自分のペースで静かに口に運ぶ。うん。相変わらず美味しい。大した材料は使っていないだろうに、この素朴ながら力強い味付けが活力と英気をもたらしてくれる。

いつも通りの朝、いつも通りの味、いつも通りの顔ぶれ、いつもどおりの食堂、ではない。気にも留めないはずだった食堂の風景に違和感を覚えれば、その答えを見つけないまで観察するのは作家の性のようなものだろうか。

初めて見る作品が壁に飾ってあった。普段なら気にも留めなかっただろうに、今日はなぜかそれに目を奪われる。

作者の名前を見る、聞いたこともない名前だった。けれど、その作品に渦巻く感情に胸が押しつぶされそうになる。

泣いている、いや、喜んでいる、これはいったいどつちだ。鮮やかでいてくすんだ配色、愚直のようで悩みを感じる筆遣い、人か、獣か、それとも無機物か、モチーフのわ

からない奇妙な造形。

それはありていに言えば凡作だ。技術も浅く、内面性もチグハグで見るものに伝えた感情が何一つわからない。

ただどういふことか、私はその絵に魅了された。

あれは。と宿屋の主に聞けば、住みつきのテイアンの【絵師】が持ってきたのだという。丁度壁のスペースが余っていたから飾っているにすぎないので他の誰かがまた持ってきたらすぐ替えるつもりなのだ。

目の肥えている宿屋の主からしても私と同じ評価。やはりこれは凡作だ。けれどもこういうことか私にとってそれは特別でしかなかった。

興味があるのなら、ちようど良いから部屋に料理を持って行ってやってくれと主に言われた。他人と食事をしたくないのか、神経質な性分なのだろうか。疑問は口に出さず言われた通りに食事を運び、部屋の扉を開ける。

その部屋では、一人の青年がまさに絵を描いている途中だった。

朝日差し込む東側の部屋。揺れるカーテン。色のちりばめられたキャンバス。汚れ

除けのシートはまだ端が傷んでもいないのにそろそろ買い替え時ではないかと思えるほど様々な色が混ざり合っていた。

あつ。と声を出したのは彼だったか、私だったか。

とつさに右腕をかばうように身体を動かす彼を見て、私は全てを理解した。

ゆつくりと、警戒されないように主に言われて食事を持ってきたことを告げる。

なるほど。これでは人前で料理を食べるのを嫌がるはずだ、諦めたかのように自然体に戻った彼の右腕は、肘から先が見当たらなかった。

慣れた様子で片手で料理を食べる彼を見ながら、私は彼に自分も作家であることを告げた。

名前を見たことがあると、彼は言った。少なくとも回数クエストを受注していれば、自然組合の中で名前は上がるものだ。大したものではないと謙遜すると、なぜか彼は同感だと言ってきてそれがたまらなく可笑しかった。

どうしたの、と聞くと、モンスターに襲われたと彼は言った。利き腕だったんだと。

ここが王都ならティアンでも欠損を治すと噂のあるマスターの手を借りることも出

来るだろうが、ここにいない人物に助けを求めても仕方がない。

どうして【絵師】を続けているのか。。。ほかのジョブに適性がなかったから。

何を思つて描いているのか。。。それは僕にもわからない。

痛くは無いか。。。寝る前に痛みがひどくなる時がたまにある。失くしたけど、消えたわけじゃないのがわかつてちよつとうれしい。

家族はどうしているのか。。。遠い村で生活している。多分僕が腕を失つたことも知らない。

寂しい？。。。一人は慣れている。

.....

.....

.....

.....

それは忘れもしない出会いの朝。運命を呪つた者同士が出会つた朝。

そしてその出会いこそが本当の呪いの朝だった。

彼と出会い、私はより作品に没頭することになった。彼の作品から感じた様々な思いを、私も具現化しようと。持たざる者にしか生み出せない光があるのだと、それを信じてひたすらキャンバスに筆を走らせる。

純粹な陰鬱とした感情が血流をたどって腕へと注がれ、刻まれた過去を浮き彫りにするように記憶を撫ぜ、殻を破ろうと模索を重ねる。

眩しさなど求めない、光よりもなお美しい色がこの身に宿っているだろうと、取り繕った衣を剥がし、纏った常識を脱ぎ捨てて己の心を写す。

作品を描いては休憩がてらに彼の部屋に遊びに行つて談笑をする。

宿代がいらぬ分、彼よりも私の方が余裕があったこともあり、おすそ分けと言つて色々なものを持つて行つたりした。

そうやって過ごした数週間、間違ひなく美しいものだった。

やがて作品作りは佳境を迎える。心血を注いだ筆が脈々と鼓動を打ちながら作品に魂を吹き込んでいく。アトリエ全体から私の持つ何か作品に収束していく。私の持

ち得る可能性を全て注ぎ込んだと自負できる出来だ。

それは紛れもなく私の最高傑作だった。

誰かに見せたい。誰に？もちろんそれは彼に。

どうして彼にそれを見せるの。

だって彼はもう一人の私だから。

なにを言っている。

彼僕はお前よりも高潔だ。

作品を見せようと彼の部屋に入った瞬間、私は何を勘違いしていたのか理解した。

そこには全てがあった。

腕を失い、苦悩した彼の作家としての一步を完全に再現した世界そのものがそこには描かれていた。

どうしたの、それ。

わからない、ただ、君と話してから随分と調子が良くなったんだ。でもまだ完成じゃない。まだ描き切れてないんだ。

なにがどうなっているのかなにもわからない、私に理解できたのはアイテムボックスの中にしまい込んだ作品がひどく滑稽な偽りの本物でしかないということだけだった。

この手によくやく馴染んできたのかな。それとも、心境の変化だろうか。ほら、この手を見ても臆さずに接してきたのって君が初めてでさ、だからやつと自分も向き合えたのかもしれない。

本当に、君には感謝しているんだ。

気分が悪いと言ったきり、気が付けばわたしは部屋を飛び出していた。

なんだあれは、なんだこの感情は。

わからない、何かが可笑しい、だめだ、考えがまとまらない。

あれはだめだ、あんなものを見ては全てが崩れ去ってしまう。

逃げ出した未来を、あり得たかもしれない可能性を、私がかめたかもしれない栄光を。

その全てを彼が持って行ってしまった。

逃げたのだ、ああそうだ。私は逃げてしまったのだ。

己に才能が無いからと、それをなそうとする度胸が気合が、氣迫が、縋りつくほどの情熱が、私には無いから。投げ捨ててこの世界に、ぬるま湯につかりきってしまったか

ら、もう戻ることが出来ない。

押しとどめられないどす黒い感情に支配されていくのがわかる。染まってしまおう。このままでは正気でいられなくなる。逃げなくては、隠れなくては、彼から、あの絵から。

私が零れ落とした可能性が、この世界で私だけを殺すだけの存在となつて襲い掛かつてきてしまう前に。

アトリエに閉じこもり、むせび泣く赤子をあやす方法もわからないまま、ただひたすらに腕を動かす、けれど、なにひとつ拭えやしない。

へばり付いた劣等感が心根を犯して嘲り笑う。駄目だ、考えてはならない、筆を持つ腕を置き、アイテムボックスの中から一つの絵を取り出して破り捨てれば、そしてそれつきり。

私の腕は動かなくなった。

筆の持ち方を忘れたわけではない。絵の描き方を忘れたわけではない。ただただひたすらに恐怖している。

何に、

あの絵が完成することに。

あの絵が完成してしまえば、きつと私は全てを失ってしまう。今でさえそうなのだ。

きつと何も得られなくなってしまう。

ああ、きつとそうだ。そうなのだ。あれは私にとつての全てだ。理想であり、本物であり、たどり着くはずだった場所であり、そして、今の私の全てを否定して滅ぼす、死そのものだ。

力なく動かなくなった腕に視線を落とせば、指先から壊死していく幻覚を見る。

そんなはずはない、マヒしているのは現実であつて、この世界の、アバターの身体には何の不都合もない、ないはずなのだ!!

けれど、そうなるのではという思いが、妄執が、身体が崩れ落ちていく未来を突き付ける。いいやその通りだ。嘘ではない、幻覚ではない。あの絵を、理想を受け止めるほどの強さを私が持ち得るものか。

凡才に過ぎないこの私ごときは、未完成のあの絵を見ただけで震えの止まらないこの私はどうなってしまうか、わかりきっているではないか。

止めなくてはならない。

彼を……

どうやって。

描くななどと言って止まる人種でないことは知っている。利き腕をなくして絵に縫りついた男だ。もう片方の腕も無くしてしまえば、いいや駄目だ。あいつはきつとそれでも絵を描こうとする。

口か、足か、はたまた欠けた腕に筆を括り付けてか、どんな手段であろうともアイツは絵を描くだろう。

そして彼がその困難を乗り越えるたびに、私はまた恐怖にとらわれてしまう。

理想を抱いても、それが私の理想と重なるうとも

それが誰かを幸せに出来るとは限らないのだ。

私が弱いから、ああそうだ。私が弱いから。でもそうじゃない。あれはそんな風に作り上げてしまつてはならないものなんだ。

わかるだろう、悲哀を乗り越えた幸せなんて、望んじやいけないんだ、その場にとどまり続けて死に絶えてもらわないといけないんだ。

狂おしいほどの切なさで身体がバラバラに張り裂けてしまいそうになる。

どれだけ言い訳を重ねても私がこれからすることを肯定してもらえないことなぞありはしない。

私自身が一番わかっている、そんなことをしても何も手に入らない、何も得られやしない。生まれるのは深く暗い望まぬ沼へと墜落。全身を後悔に浸食されるだけの未来。

でも、

もう、

これしか方法がわからない。

……

崩れ落ちた男の名前は、もう覚えていない。彼の描いた作品など、おそらく誰も知りえない。

赤く染まるキャンバス、切り刻まれた肉、破り捨てられた紙片。戻れない未来、鉛の海に沈むようにゆっくりとそして確実に光を失っていく男の瞳。

ありがとう、そして、ごめんなさい。

届かない言葉、呆れかえるほどあつさりと為された凶行。騒ぎを聞きつけて様子を見に来た主と組合員。

取り押さえられた腕には鈍色に光る一本のナイフ。

騒然とするさなかに響く笑い声。ゆっくりと歌うように告げられた〈自害〉の言葉。

かくして、一人の尊い命が奪われ、二人の輝くはずの未来は黒く塗りつぶされる。

.....

現実世界に戻され、マヒしていない手で筆を握ってみた。けれど、思い通りの線を描くことなど出来やしない。両親が心配するまで腕を動かしてみたけれど、得られたものは底無しの絶望だけだった。この手では絵が描けないと。叶えられる未来などないのだと、奪った可能性が宿ることなどありえないのだと、そう理解した。

.....

アトリエの窓から消えてしまいそうな偽りの青空を眺めながら、私は絵を描いていた。

失われた未来、零れ落ちた可能性を拾い集めるように筆を振るう。

脳が描いた残影の通りに筆が軌跡をたどることのなんと特別なことか。しかし理想

は遙か遠い。

もう手に届かないところへと行ってしまった、望みを絶つことの代償とすら言えない愚かな行為の成れ果て。

カケナイ……トドカナイ……モドレナイ……

全てを犠牲にした逃避行、全てを失った未来予想。

停滞する世界の中に閉じ籠りながらもジョブを戻さないのは何の意識の表れなのか。報われないと知ってなお、何かを得ることなど二度とないのだと知ってなお、絵を描くしかない。

それすら失ってしまえば、自分が何のためにここにいるのかすらわからなくなるのだから。

私はここで絵を描くしかないのだ。

理想を殺したこの腕で。

靈国所属 【書記】 V : アームズ

靈国所属 【書記】 V : アームズ

この手帳を開くのも、これで何度目になるだろうか。

アイツと過ごした旅の記録。

眠りにつくアイツに忘れないと約束したにもかかわらずこれを見なければ旅の記憶を鮮明に思い出せない。年を経てますます酷くなった自分の馬鹿さ加減にほとほと呆れる。

ランプに照らされた手帳を覗き込みながら、思い出をしたためる。目じりに力が入る。堪え性の無い涙が原稿に染みを生む。

止めようもない張り裂けそうな胸の痛みを抑えながら、手帳に向かう。アイツのいない世界にきている理由。ただ一つやり残していること、だからこそ。

出会いはさほど劇的でなく。間柄が深まる起因も日常の延長線上に属するものだった。

村に立ち寄った一人の旅人とその村一番の狩人。ありていに言ってしまうばそれだけの繋がり。それだけの関わり合い。

そうならなかつたのは互いを求めていたから。

アイツは強い用心棒を。俺は土地に詳しい協力者を。

安全を求める俺と、好機を逃すまいと危険を冒すアイツ。

方針を一致させるだけで一日かかったこともあつた。

固いだけで味のしない干し肉を奪い合った夜。

アイツの策略と俺の力で森一番の獲物を仕留めた日。

村を出て、一緒に旅をしようと言い出したのは果たしてどちらからだつたか。

危険なモンスターの根城も臆さずに挑むアイツの豪胆さに憧れた。

誰かを守るためならと、一つしかないその命を易々と投げ捨てようとする愚かさに憧れた。

アイツとの旅の初めから終わりまで。この手帳にはそのすべてが書き込まれている。

けれど、いや当然のことだが世界はアイツがいなくても回つていく。目の前を横切る誰でもに聞いたところで誰もアイツのことを知らない。

それが事実。

出会った村は、今はもう無い。この世界において村一つが無くなるなんてことは割とよくあることだ。殺されたか、連れ去られたか定かではない。確実なのはアイツとの思出を共有できる人々を失ったということ。それだけだ。

この手帳に記されているものだけだ。埃かかった俺の頭ではアイツの顔を鮮明に思い出せない。

出会った頃の、俺のことを欠片も信用していない顔。如何にもな差別主義的な言葉遣いをしてきていた頃。何も見ず鮮明に思い返せる記憶は、何故かそんなものばかり。

手帳に記されたアイツの姿が掠れていく。居たかもしれないと、居なかつたかもしれないと。そうならないように、指を動かす。

存在証明。この世界に生まれ、そして大地へと還っていったアイツの。

それこそ見届けてしまった者の定め。

最初で最後のアイツの相方として、最後に為すこと。

したためる。記憶の帳をかき分けて。俺が知っているアイツの全てを書き残す。

誰も知らない物語。そこにアイツは居た。俺はアイツに救われた。大したことを為

したわけじゃあない。けれど、アイツのいた証を世界に刻む。それだけの、それだけのことだ。